

文部科学省 令和4年度

成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業 採択事業

シリコンアイランド九州の中心で  
外国人材の受入れ・共生を支える  
教員等養成・研修プログラム@教職大学院  
実施報告書





## ご挨拶

令和の時代に入り、少子化に伴う人口減少は、地方において急速に進むことが予想されており、地域における人材育成や教育と研究開発を通して地域の活性化に貢献してきた大学等高等教育機関の存続に深刻な影響を与えることのないよう、地域の高等教育の存続に向けた抜本的対策について検討が進められている。

内閣府に設置された教育未来創造会議によって出された第一次提言（我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について 2022年5月）では、2050年には日本の人口は1億人まで減少し、15歳から64歳までの人口比率は5割になると予想されている。人材育成を取り巻く課題についても、「デジタル人材の不足」「グリーン（脱炭素化）人材の不足」「高等教育の理系離れ」「諸外国に比べて低い理工系への入学者」「諸外国に比べて少ない修士・博士の取得者」「世帯収入が少ないほど低い大学進学希望者」「諸外国に比べて低調な人材投資・自己啓発」「進まないリカレント教育」等が挙げられている。

教育未来創造会議の第一次提言では、こうした状況をふまえながら、教育の在り方を創造することが、教育による未来の個人の幸せ、社会の未来の豊かさの創造につながるとして、誰もが幼少期からその意欲に応じて学ぶことのできる環境を整備すること、高齢になってからも意欲があれば社会の支え手として生涯にわたり学び続けること、などの重要性を指摘し、その解決に向けた課題点を整理している。その上で、これからの未来の社会を築く上で求められる人材として、「様々な社会課題を発見し、横断的観点から解決していくことのできる人材」「文化や美意識等に対する素養を身に付け、エシカルな行動ができる人材」「急激な社会環境の変化を受容し、新たな価値を生み出していく精神を備えた人材」などが挙げられ、それらを実現して行くための方策として、(1)未来を支える人材を育む大学等の機能強化、(2)新たな時代に対応する学びの支援の充実、(3)学び直し（リカレント教育）を促進するための環境整備の観点から吟味・検討されている。

令和4年度 成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業（D.リカレント教育モデルの構築による大学院教育改革支援）に採択された本プログラムは、世界的な半導体企業の熊本への進出を機に、外国人材の受入れ・共生を支える教員や支援員等のための養成・研修に係るプログラムである。熊本県・熊本市教育委員会やNPO法人との連携により、これまで県内・市内の受入れ拠点校において外国につながる子どもたちを受け入れてきた実績を踏まえて、対面での講義や学校観察実習等によって構成されている。

20年以上にわたって外国につながる子どもたちを受入れてきた熊本市内の拠点校の取組みや、近年急速に受入れ数が増加した熊本県内の拠点校の取組み等の事例を通して、帰国子女や外国籍の子どもたちの学校生活を支える様々な支援のあり方について深く学ぶことができるリカレント教育（履修証明）プログラムとして、短期間のパイロット実施の実際をまとめたものである。本プログラムが、母語と現地語（日本語）が異なり、母語の発達も十分でないまま現地語のみの厳しい教育環境に置かれた子どもたちの学習を支えられる研修プログラムとして、同年齢同士の子どもの交流が非常に大事になる思春期において、うまく交流できない危機的状況を適確に把握し、支援の手を差し伸べられる研修プログラムとして、さらには急激な社会環境の変化を受容し、新たな時代に対応した学びにつながるリカレント研修プログラムとして、しっかり根を張りながら発展していくことを期待するものである。

## 目次

1	はじめに	03
2	本プログラムについて	05
3	研修プログラムの開発・実践について	
	A) 短期（履修証明）プログラム：ガイダンス	12
	B) 外国につながる児童生徒の教育Ⅰ	15
	C) 外国につながる児童生徒の教育Ⅱ	19
	D) 外国につながる児童生徒の教育Ⅲ	23
	E) 教育実践研究	26
	F) 成果発表会	38
	G) 受講者の声～学びを広げて～	40
4	先進事例・海外調査の取り組みについて	42
5	クラウドファンディングの取り組みについて	46
6	おわりに	48

# 1. はじめに

## 外国につながる子どもたちの学習支援の輪を広げるために

外国につながる児童生徒の教育検討委員会

委員長 山城 千秋

熊本のグローバル化は、2021年10月に台湾積体回路製造（TSMC）の進出が明らかになって以降、急速に可視化され注目されてきた。親の就労にともない、来熊する子どもも増加しており、その多くが日本語をまったくわからないまま公立学校に編入する。一部の公立学校では、日本語指導を充実させる施策がとられてきたが、日本語指導が必要な子どもたちは、今や県内に広く在籍している。こうした熊本の学校教育における急速な国際化と多文化化に対し、教員の第二言語習得やバイリンガル教育に関する理解と研修は、まだ不十分であるといえる。また、日本語教室が設置されている学校は数校と限られており、外国につながる子どもたちを想定したカリキュラム・マネジメントや実践、研修の充実が喫緊の課題となっている。

以上のような状況をふまえ、教員養成を主眼とする本学大学院教育学研究科では、教員のリカレント教育の一環として「外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム」を立ち上げた。本研修では、教員をはじめ学習支援者に求められる教育上の基礎的知識や学習課題の把握・分析、学習者の特性に応じた学習プログラムの開発、多様な主体との連携・協働によるネットワーク形成などについて修得することをめざしている。また、観察実習では、日本語教室を設置する公立学校での日本語指導と教科指導を視察し、子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた学習支援の具体を知ることができる。

教育基本法第4条（教育の機会均等）は、「すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない」と、一国の言語、文化、民族を超えて多文化共生社会を担う人材の育成がめざされている。熊本の公立学校における「教室の国際化」がすすむなかで、日本語指導が必要な子どもたちの学ぶ権利を保障する取り組みは、障害や特別な教育的ニーズをもつ子どもたちの教育にも通じるものであり、誰もが教育から排除されない社会をつくることを意味する。

2024年春には、熊本に初めての夜間中学が開設する。学習支援者となる私たちには、支援がないことによって、学習機会から排除されることにより生じる不利益を多元的に理解し、生涯にわたり学ぶことと学習者の生活・文化や人生の豊かさとのつながりを洞察することが求められている。

教員をはじめとする学習支援者も、学習者として学び続けるためのコミュニティやネットワークが必要である。今回の学習仲間とのつながりを大切に、実践交流や情報共有が図られ、学び続けられることを期待する。また、地域社会には多様な言語や文化的背景をもつ外国人が在住しており、今後はさらに支援者の属性を広げていくことも検討する必要があるだろう。





# 2. 本プログラムについて

## プログラムの目的と概要

熊本では、世界的半導体企業 TSMC の進出（令和6年新工場稼働開始予定）を機に関連企業の集積が急速に進みつつあり、シリコンアイランド九州復活に向けた動きの真ただ中にあると言っても過言ではない。また、それに伴い、**外国人材の受入れ・共生が地方創生の重要な課題**となり、その鍵の一つである外国につながる児童生徒の教育の充実が急務となっている。この点について、「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（令和4年度改訂）」では、「外国人児童生徒の人数に応じた教員等の数を確保するとともに、教員等の資質・能力の向上を図ることが必要不可欠となっている」としている。

しかし、熊本においては、外国につながる児童生徒の学習支援・生活支援についての知識・技能を有する教員や協力員が不足しており、県内の45自治体のうち、小中学校で日本語指導を実施しているのは20自治体にとどまる（令和4年3月時点、NPO法人「外国から来た子ども支援ネットくまもと」調査）。また、熊本市では、現在約40校に多様な背景を持つ外国につながる児童生徒が在籍しており、将来的には各区に日本語指導拠点校を置く計画であるが、教員研修や協力員・支援員の増員等の課題を抱えている。

本プログラムでは、以上のような状況を踏まえ、県・市教育委員会やNPO、関連企業等と連携し、教職大学院における短期（履修証明）プログラム等のパイロット実施を嚆矢として、外国につながる児童生徒の教育を担う**教員等の養成・研修**の体制構築を進めることを目的とする。

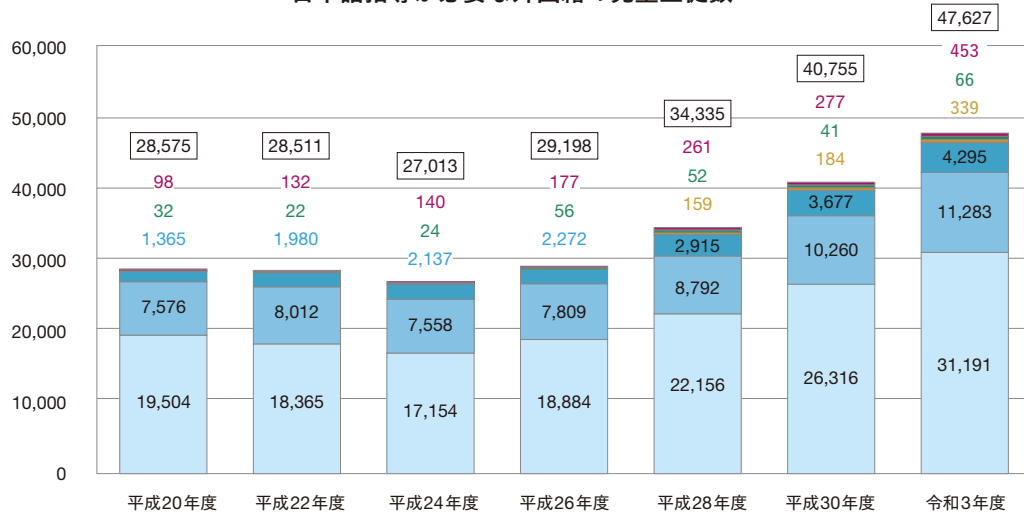
**外国につながる児童生徒**  
外国籍の子ども、日本国籍でも外国にルーツを持つ子ども、母語や家庭での使用言語が日本語以外の子どもなど



## 学習支援・生活支援が必要な「外国につながる児童生徒」が全国的に増加

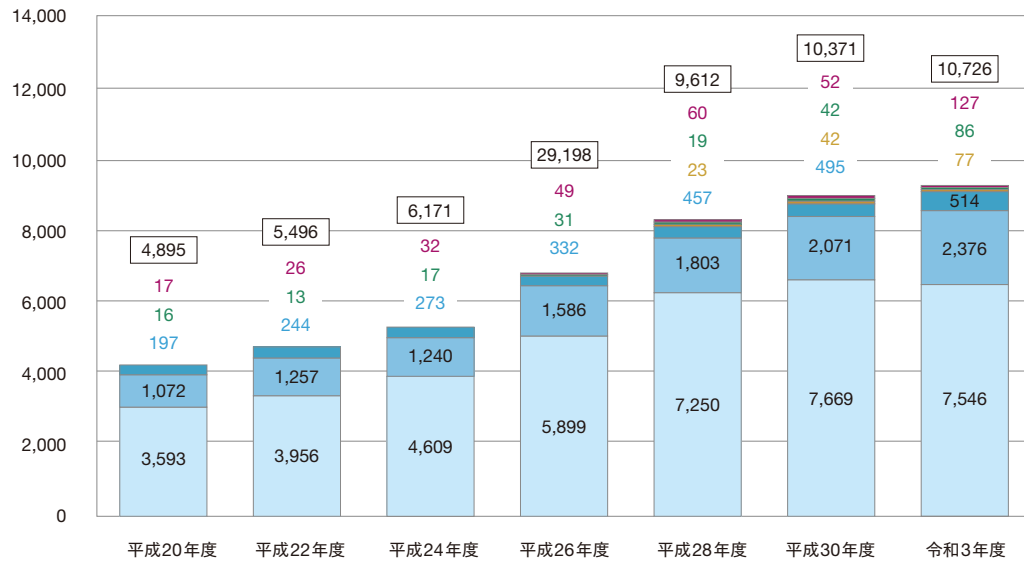
■ 小学校
 ■ 中学校
 ■ 高等学校
 ■ 義務教育学校
 ■ 中等教育学校
 ■ 特別支援学校
  合計

### 日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数



文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果の概要（速報）」より転載

### 日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数



文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果の概要（速報）」より転載

### 熊本県内の外国人労働者の雇用状況（過去3年）

	令和2年（前年度比）	令和3年（前年度比）	令和4年（前年度比）
外国人労働者数	12,928 (4.7%増)	13,013 (0.7%増)	14,522 (11.6%増)
雇用事業者数	2,910 (6.1%増)	3,064 (5.3%増)	3,189 (4.1%増)

厚生労働省「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和4年10月末現在）」に基づき作成

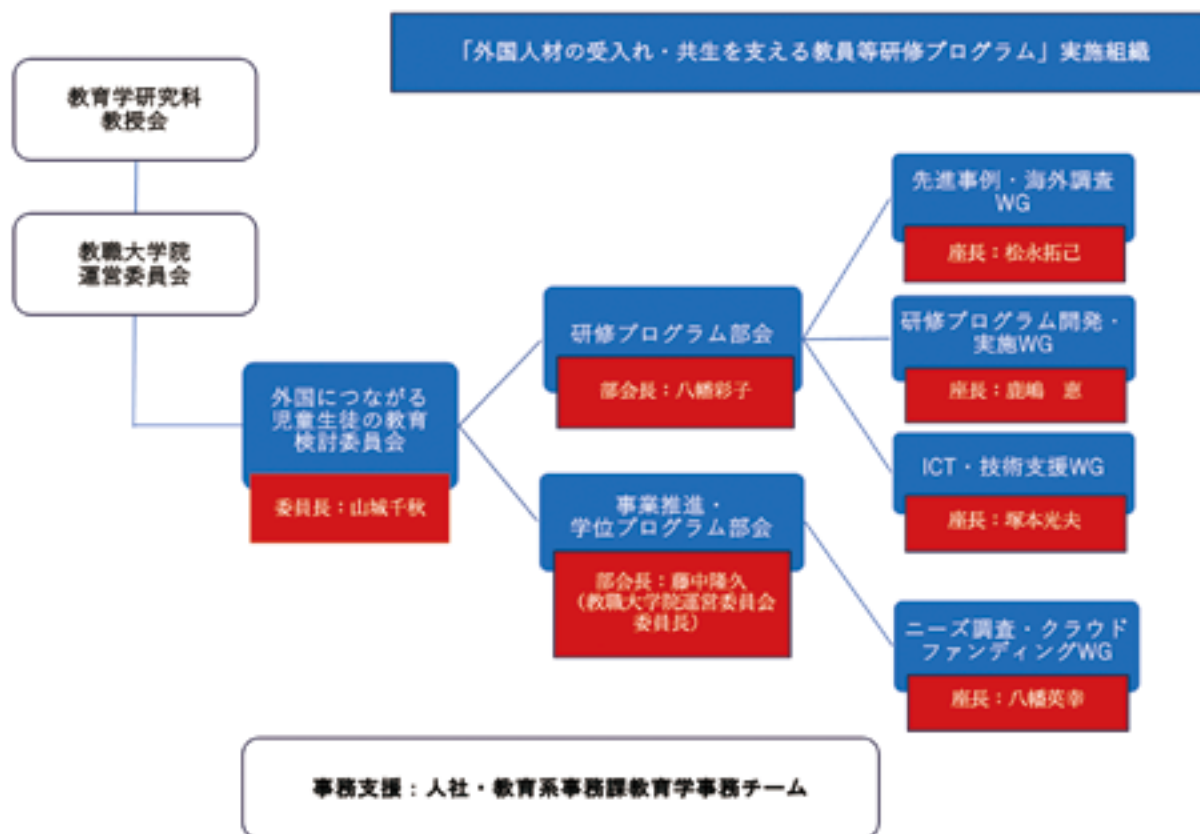
令和4年度の熊本県の外国人労働者数は全国で第22位。前年度比11.6%増で、今後さらに伸びが予想される。



## プログラム実施組織・実施体制

プログラムを推進する2つの専門部会と4つのワーキンググループを総括する「外国につながる児童生徒の教育検討委員会」（学外委員6名を含む25名で構成）を設置しました。同委員会では、熊本県・市教育委員会担当者、日本語教育拠点校校長、外国につながる児童生徒の支援を行うNPO法人代表、日本語教育の教員養成課程を持つ大学教員等が学外委員を務め、リカレント教育プログラムの講師選定や、受講生の募集・実習先確保等において支援をいただいている。

### 実施体制



## 外部機関との連携

	人材ニーズ等の把握	プログラムの開発・実施	成果検証	他機関等への横展開
熊本大学教職大学院	○調査実施	○開発・実施	○検証	○提供
附属学校	○調査協力	○開発協力	○協力	○モニター実施
関連企業等	○情報提供			
熊本県・市	○調査協力			
熊本県・市教育委員会	○調査協力	○開発協力	○検証	○実施
熊本市日本語教育拠点校	○調査協力	○開発協力	○検証	○実施
当該児童生徒受入れ(予定)校	○調査協力	○受講	○協力	○実施
NPO 法人・団体等	○調査協力	○協力		○情報共有
関連する教育課程を有する大学		○協力		○情報共有

熊本県・市教育委員会から、外国につながる児童生徒の教育検討委員会に委員として加わっていただき、情報提供や事業プログラムへの助言を得た。こうした助言を踏まえ、本プログラムの実施にあたり、熊本県・市日本語教育拠点校から研修プログラムへの講師派遣ならびに受講生の教育実践研究（観察実習）受入れ等の支援を得ており、研修プログラム全体を通して、教育実践的な知見・実践の機会の提供をいただいた。また、外国につながる児童生徒の受入れ（予定）校に対して、熊本県・市教育委員会から、本プログラム受講の呼びかけなどの働きかけを行っていただいた結果、当初の募集人員をはるかに超える53名の受講者を確保できた。

本事業プログラム（一般市民向けに開催したキックオフシンポジウムを含む）の講師ならびに受講生には、熊本県・市の国際交流事業担当者や県内外の日本語教育に関する教員養成課程を有する大学の教員・担当者、外国につながる児童生徒の支援を行う NPO 法人の関係者等も含まれており、関係する外部諸機関と協力しながら、本事業のスタートを切ることができた。

# 本年度の取組について

## 計画概要

1—外国人材受入れに伴う児童・生徒の教育ニーズ及び対応状況に関する調査

2—外国につながる児童生徒の教育を担う教員等の養成・研修プログラムの開発

対象：学校教員、免許保有者、一般社会人、大学生など

内容：学習支援（日本語教育、異文化理解等）

生活支援（心理面の支援、保護者への支援等）

・ 短期（履修証明）プログラム

・ オンサイト研修 出前講座

・ 協力員・ボランティア養成

→ 本年度パイロット実施

・ 長期（専門職学位）プログラム → 令和6年度より開設予定

### ①短期（履修証明）プログラム

「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ」では、日本語教育学会「豆の木モデル」の開発に携わった東京学芸大学 齋藤ひろみ教授を基調講演者に迎え、県内関係者をシンポジウムパネリストとしてキックオフシンポジウムを開催したところ、一般市民を含む85名の参加があり、好評を得た。

「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ」「同Ⅱ」を実施し、これらの科目の合格者45名を対象に、「教育実践研究」の観察実習を11月末～翌1月に実施した。また、「外国につながる児童生徒の教育Ⅲ」を令和5年12月に実施した。令和6年2月4日には「教育実践研究」及び「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ～Ⅲ」のまとめと受講生による成果発表会を実施した。

### ②オンサイト研修（出前講座）

台湾視察ならびに短期（履修証明）プログラムをもとに、オンサイト研修用動画を作成中です。今後、オンサイト研修用に活用を予定している。

### ③熊本県への外国人材受入れに伴う児童・生徒の教育ニーズ及び対応状況に関する調査

1) 半導体企業等の進出に伴う外国人材の受入れ状況の調査

熊本県教育委員会から、県内小・中学校における日本語指導が必要な児童生徒の状況に関する情報提供をいただいた。

2) 外国につながる児童生徒の教育ニーズ及び対応状況の調査

今後、日本語指導が必要な児童生徒が在籍する学校等において、対応状況等の調査を実施予定。

 Kumamoto University

## 外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム キックオフシンポジウム

今、熊本では、世界的半導体企業 TSMC の進出を機に、外国人材の受入れ・共生を促進する上で重要な鍵となる外国につながる児童生徒の教育の充実が急務となっています。

しかし、外国につながる児童生徒の学習支援や生活支援についての知識・技能を有する人材が不足しているため、熊本大学大学院教育学研究科では、熊本県・市教育委員会や NPO 等と連携し、外国につながる児童生徒の教育を担う教員等の養成・研修の体制を整備することとしました。

本シンポジウムでは、この新たな取組を紹介するとともに、本年度パイロット実施する教職大学院における短期（履修証明）プログラムの一部を公開します。

**日時** 令和 5 年(2023 年) 9 月 30 日(土) 13 時 30 分～16 時 30 分

**会場** 市民会館シアーズホーム夢ホール  
(熊本市民会館) 大会議室

**参加費** 無料(コロナに配慮した定員 100 名)

**申込方法** 9 月 15 日(金)までに下の QR コードにより参加申込をお願いします。

### Silicon Island Kyushu プログラム

**基 調 講 演** 外国につながる児童生徒の教育と教員養成における「豆のモモデル」  
講 師 東京学芸大学 教授 齋藤 ひろみ 氏

**シンポジウム** 熊本における外国につながる児童生徒の教育の充実のために  
パネリスト 熊本県教育委員会 義務教育課 課長(熊本県教育推進室長) 松永 尚子 氏  
熊本県立緑山中学校 校長 山口 恭子 氏  
同 日本語指導担当 宮永 香子 氏  
熊本大学大学院教育学研究科 教授 藤中 隆久 (教職大学院専攻長)  
ファシリテーター 同 教授 山城 千秋 (教育実践センター長)  
アドバイザー 東京学芸大学 教授 齋藤 ひろみ 氏

総合司会 熊本大学大学院教育学研究科 教授 八幡 彩子 (教職大学院副専攻長)

主催 熊本大学大学院教育学研究科 後援 熊本県教育委員会・熊本市教育委員会

お問い合わせ：熊本大学教育研究支援課 人社・教育系事務課 参加申込はこちらから  
教育学事務チーム(教務担当) 電話 096-342-2526

本シンポジウムは、文部科学省「令和 4 年度成長分野における即戦力人材輩出に向けたタレント教育推進事業」採択プログラム「シリコンアイランド九州の中心で外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム(教職大学院)」の一環として実施するものです。

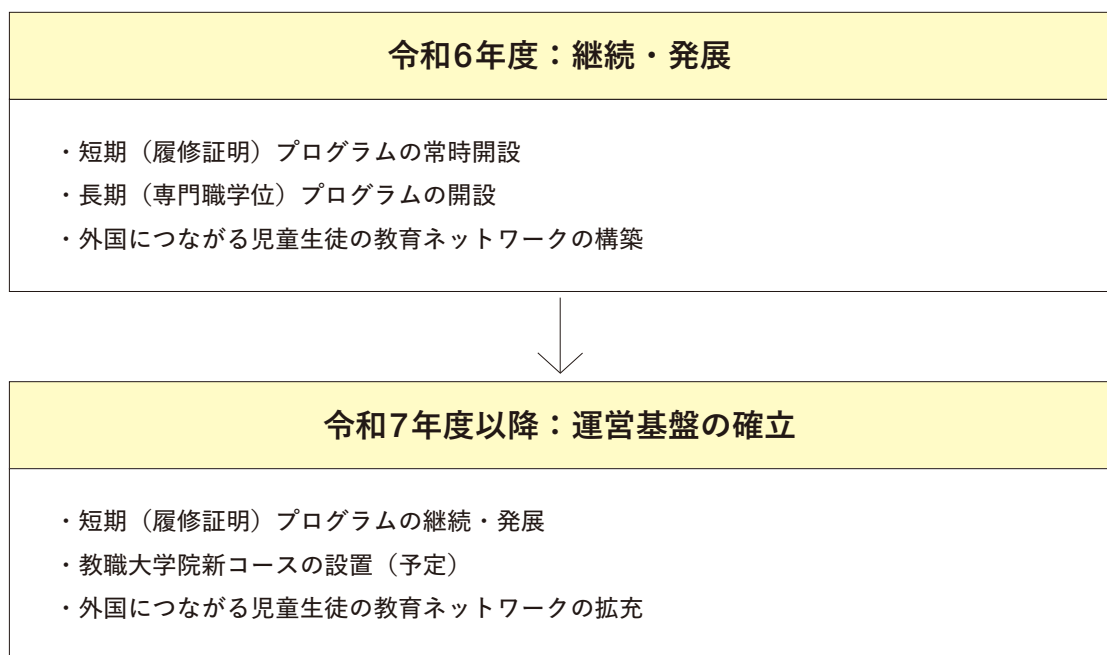


キックオフシンポジウム チラシ

## 履修証明プログラム 受講生単位取得状況

科目名	受講者数	単位取得者数
外国につながる児童生徒の教育Ⅰ	53 人	46 人
外国につながる児童生徒の教育Ⅱ	53 人	47 人
外国につながる児童生徒の教育Ⅲ	52 人	44 人
教育実践研究	45 人	39 人

## 今後の取組について



### 《課題》

- ・ 現職教員等の受講者に対する補助、インセンティブがあることが望ましい
- ・ 運営基盤の確立のため、安定的な運営資金の調達が必要

#### ①教職大学院における短期（履修証明）プログラムの常時開設

今年度パイロット実施した短期（履修証明）プログラムの取組やスケジュールをもとに、令和6年度以降も、短期（履修証明）プログラムとして、常時開設予定。

#### ②教職大学院における長期（専門職学位）プログラムの開設

令和6年度、教職大学院における長期（専門職学位）プログラムとして開設する。

#### ③教職大学院・教育学部・附属学校の連携に基づく教員養成・研修プログラム全体の国際化

本事業では、附属学校と大学（教職大学院）の教員との共同研究により、教職大学院・教育学部・附属学校における教員養成・研修プログラム全体の国際化を図ることとしており、台湾視察、国際バカロレア認定校の大阪教育大学附属池田中学校、東京学芸大学附属国際中等学校等への視察を実施した。

また、今後、本学教育学部附属学校に外国につながる児童生徒を受入れ、研修プログラムにおける受講生の教育実践研究（観察実習）の受入れ先として附属学校を活用することも検討中である。

# 3. 研修プログラムの開発・実践について

## A 短期（履修証明）プログラム：ガイダンス

### プログラムの背景と概要

短期（履修証明）プログラムのガイダンスでは、本プログラムの目的と概要（本報告書 p.5、p.9参照）を示した上で、本プログラムで養成を目指す人材像、令和5年度開講科目の日程・実施方法、評価方法等について説明を行った。

### 養成をめざす人材像

本プログラムで養成を目指すのは、次のような人材像である。

- 外国につながる児童生徒を深く理解する人材
- 外国につながる児童生徒の教育に専門性を発揮できる人材
- 多文化共生の視点を有し、学校・学級作り地域作りに貢献できる人材

熊本大学大学院教育学研究科  
履修証明プログラム（教職大学院）  
外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム

### 令和5年度 受講生募集

募集期間：令和5年9月1日から  
募集期間：令和5年9月1日～9月31日まで  
募集期間：令和5年9月1日～9月31日まで（要する場合は）  
対象人数：20名程度  
対象者：（国別不限）学校教員、および教員免許保有者  
募集地域：全国  
応募方法：熊本大学教職大学院 教育学研究科ホームページから  
応募先が異なります。

（ご挨拶）  
当、熊本では、国際化推進の一環として、外国人材の受入れ・共生の観点から取り組んでいます。令和5年度、熊本の国際化推進の一環として、外国人材の受入れ・共生の観点から取り組んでいます。令和5年度、熊本の国際化推進の一環として、外国人材の受入れ・共生の観点から取り組んでいます。令和5年度、熊本の国際化推進の一環として、外国人材の受入れ・共生の観点から取り組んでいます。

プログラムを通じて、以下のような人材（教員等）を養成します

- 外国につながる児童生徒を深く理解する人材
- 外国につながる児童生徒の教育に専門性を発揮できる人材
- 多文化共生の視点を有し、学校・学級作り、地域作りに貢献できる人材

熊本大学教職大学院 教育学研究科  
〒860-0811 熊本県熊本市東区 熊本大学教職大学院 教育学研究科  
TEL 096-354-1111  
E-MAIL kyo@kumamoto-u.ac.jp

令和5年度受講生募集チラシ



## 令和5年度の日程・実施方法等

令和5年度の日程・実施方法等は次の通りである。

科目名	日時	場所	授業実施方法
外国につながる 児童生徒の教育Ⅰ	9月30日(土)・ 10月1日(日)	市民会館シアーズホーム夢ホール 大会議室 県民交流館バレー研修室	対面・オンデマンド (授業録画を事後配信)
外国につながる 児童生徒の教育Ⅱ	10月28日(土)・ 29日(日)	熊本大学教育学部講義室	対面・ハイフレックス (同期型Zoom)・ オンデマンド
外国につながる 児童生徒の教育Ⅲ	12月23日(土)・ 24日(日)	熊本大学教育学部講義室	対面・オンデマンド
外国につながる 児童生徒の教育Ⅳ	2024年実施予定	熊本大学教育学部講義室	対面・ハイフレックス・ オンデマンド予定
教育実践研究	【事前指導】11月 【観察実習】2023年 11月～2024年1月 【事後指導】2024年 2月4日(日)	【観察実習】熊本市立桜山中学校, 熊本市立帯山中学校, 熊本市立楠 小学校, 菊陽町立武蔵ヶ丘小学校, 熊本市立黒髪小学校 【事前・事後指導】熊本大学教育 学部講義室	【事前指導】オンデマンド 【観察実習】対面 (3校を選択して参加) 【事後指導】対面・ オンデマンド

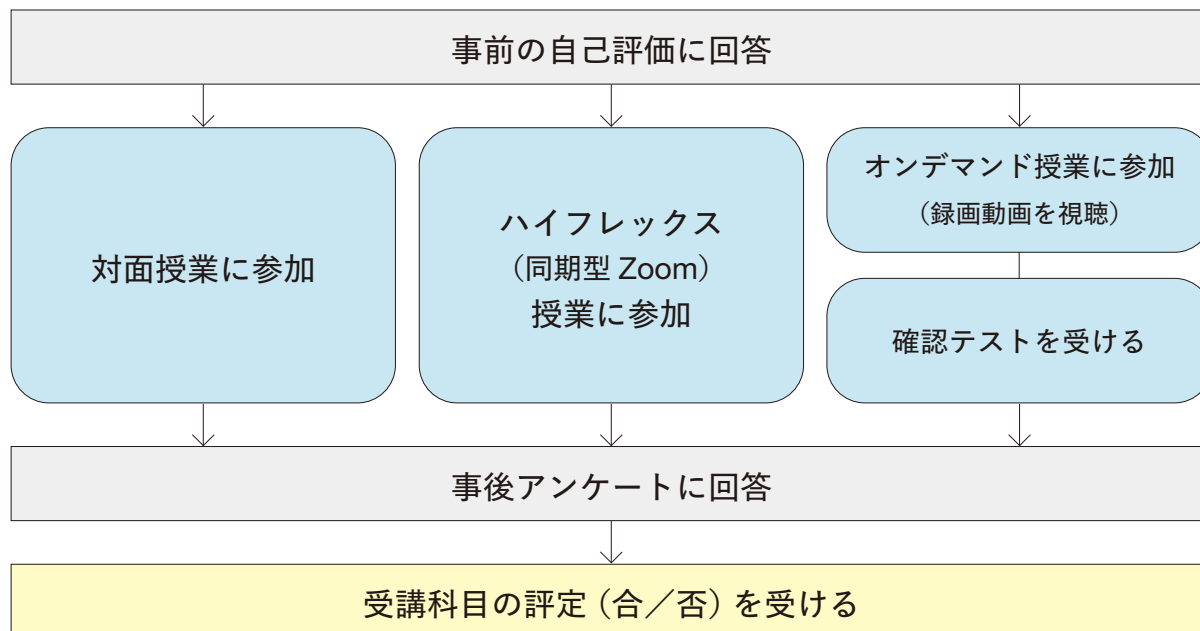
## リカレント教育としての取り組み

本プログラムをリカレント教育として実施する特色は、次の通りである。

- \* 土日2日間で各科目(1単位)の受講が修了。(短期受講)
- \* 熊本大学で導入されている e-learning 学習支援システム Moodle を利用し、受講生は遠隔授業に取り組むことが可能。
- \* 期間内(令和5年9月～令和6年9月)に、必要時間の履修ができなかった場合は、受講期間を延長可能。
- \* 教育実践研究(観察実習)が、今年度の実施日に参加できない場合、不足する時間分は、次年度実施の実習への参加が可能。

## 評価までの流れ

3種の受講形態ごとの評価までの流れは、次の通りである。



教育実践研究（観察実習）の様子

## B 外国につながる児童生徒の教育 I

### シラバス

年度	科目名	課題領域	単位数		
2023年度	外国につながる児童生徒の教育 I	子どもの実態の把握 社会的背景の理解	1		
授業の目的	1. 外国につながる児童生徒の現状と背景についての理解を深め、その実態の多面的な把握の視点を得ることを目指す。 2. 外国につながる児童生徒の生活上・学習上の困難点を理解し、文化的多様性を尊重しながら学校生活を支える視点や支援体制について考える。				
学修目標 (目標とする資質・能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものシグナルを見逃さず、文化間移動と発達の視点をもってその困難さを理解することができる。《捉える力：ア*》</li> <li>・子どもの心理的状況を文化適応や家庭の状況に関連づけて理解することができる。《捉える力：イ*》</li> <li>・認知面の力と教科等の学力を、年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。《捉える力：エ*》</li> <li>・文化間移動や家族の状況を、グローバル化や歴史的背景、社会制度の変化等に関連付けて理解することができる。《捉える力：カ*》</li> </ul>				
各回の授業内容					
回	月日	時間帯	授業テーマ	内容概略	担当教員／ゲスト講師
1	9月30日	午前1 (90分)	外国につながる児童生徒を理解しよう(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開講式、ガイダンス</li> <li>・児童生徒を受け入れる際に必要なことを考え、知識や理解を深める。</li> </ul> ▷ B	藤本典子(教育学部 客員教授)・鹿嶋恵(大学院教育学研究科 特任教授)
2	9月30日	午前2 (90分)	外国につながる児童生徒を理解しよう(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異文化接触と文化変容について基本的な知識を得て、児童生徒のおかれた状況への理解を深める。</li> </ul> ▷ E, D	鹿嶋恵・藤本典子
3	9月30日	午後1 (60分)	<b>【基調講演】</b> 外国につながる児童生徒の教育と教員養成における「豆の木モデル」	外国につながる児童生徒の教育の教育の担い手育成と「豆の木モデル」開発の基本的な考え方を理解する。 ▷ A, B	◇講師 齋藤ひろみ氏(東京学芸大学 教授)
4	9月30日	午後2 (120分)	<b>【シンポジウム】</b> 熊本における外国につながる児童生徒の教育の充実のために	◇パネリスト <ul style="list-style-type: none"> <li>・松永尚子氏(熊本県教育委員会 義務教育課 英語・日本語教育推進室長)</li> <li>・田口恵子氏(熊本市立桜山中学校 校長)</li> <li>・宮永直子氏(熊本市立桜山中学校 教諭 日本語指導担当)</li> <li>・藤中隆久(大学院教育学研究科 教授 教職大学院専攻長)</li> </ul> ◇ファシリテーター 山城千秋(大学院教育学研究科 教授 教育実践センター長) ◇アドバイザー 齋藤ひろみ氏(東京学芸大学 教授) ▷ A, B	

5	10月1日	午前1 (90分)	よりよい学びの場にするため に(1)	・シンポジウムの振り返り ・外国につながる児童生徒の教育に関わる人として、自分を見つめなおし、課題を意識する。 ▷ A, B, N	藤本典子・鹿嶋恵
6	10月1日	午前2 (90分)	外国につながる児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは	・子どもの第二言語習得のプロセスについて知識を得る。 ・日本語の言語発達と日本語での教科学習の関係性や、必要性を理解する。 ▷ F	鹿嶋恵・藤本典子
7	10月1日	午後1 (90分)	外国につながる児童生徒との関わりを考えよう	・体験談や事例を元に、外国につながる児童生徒がおかれた状況への理解を深める。 ・異文化接触や心的文化変容について基本的知識を得る。 ▷ E, D	鹿嶋恵・藤本典子、 ゲストスピーカー
8	10月1日	午後2 (90分)	よりよい学びの場にするため に(2)	・学校内外における連携の重要性を理解する。 ▷ L, C	藤本典子・鹿嶋恵
履修条件			教員免許の有無にかかわらず、どなたでも受講可能。		
評価の方法			授業への参加、事後アンケート		

\*ア～マの記号は「豆の木モデル」において、外国人児童生徒等教育に携わる教師に「求められる具体的な力」を、また▷A～Nの記号は同じく教員の「養成・研修の内容構成」に該当する。詳しくは、下記文献のpp.5-10を参照。公益社団法人日本語教育学会（2020）『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』（<https://mo-mo-pro.com/report>）

## 実施概要：外国につながる児童生徒の教育 I

### 授業概要

外国につながる児童生徒の教育を担う教師に必要な資質・能力の中の一つ「捉える力」を育てる授業である。

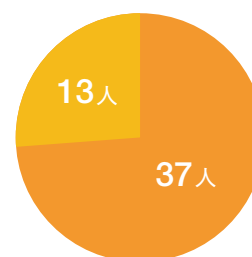
目の前にいる児童生徒の実態を、日本語能力だけでなく、文化間移動による子供の心理的状況や家庭状況などから多面的に把握し、その困難さを理解すること、また、その状況を歴史的背景や社会制度の変化等に関連付けて理解することができる内容で構成した。

授業の導入においては、斎藤ひろみ氏の基調講演。また、その後、現在熊本の日本語教育の中核にある方によるシンポジウムを行った。受講生には、「日本語指導」の重要性、現状、施策や制度等について、これからの学びのよい導入となった。

### 受講生単位取得状況

受講生53人 単位取得者数46人

### 授業形態別の受講者数



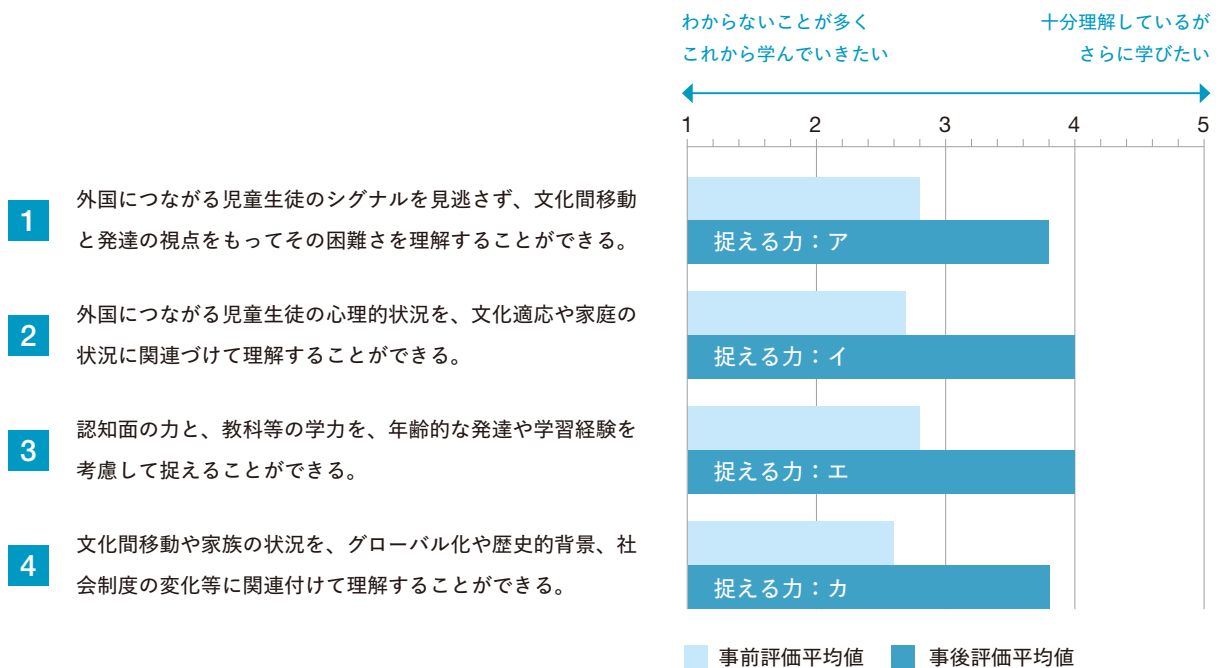
対面受講      オンデマンド受講

## 事前の自己評価+事後アンケートの結果

本プログラムでは、各科目の授業を受講する前と受講後に、学修目標に対する受講生本人の自己評価を実施した。いずれも学習管理システム Moodleのアンケート機能を利用し、事前の自己評価は科目のガイダンスの直後に実施、事後評価は90分×8回(1単位)の授業受講後に実施した。回答は「1：わからないことが多く、これから学んでいきたい」から「5：十分理解しているが、さらに学びたい」までの5段階評価から1つを選択する形式である。

次図は、その事前・事後評価の変化を示したものである。いずれも科目も、事前の評価の平均値は2～3であったが、授業後ではそれが4前後に伸びており、受講生の自己評価の向上が明白に読み取れる。

### 学修目標に対する受講生の自己評価の事前・事後の変化 (外国につながる児童生徒の教育 I)



## 授業参加者の声

○印象に残ったのは、「子ども達の一生を左右する大切な時期に日本を選び、学校で学んでいる」という言葉です。今まで勤務校の外国につながる子ども達に何ができるか分からず、ただ見過ごしてしまうことが多かったので反省しています。

「入っていく方ではなく、受け入れる方が動かなければいけない」という言葉も心に響きました。自分ができていなかったことを反省し、子ども達の気持ちを想像して、こちらからしっかり関わろうという気持ちになりました。

ゲストスピーカーのように、「素敵な先生と出会えた。」といつか思ってもらえるように明日から少しずつ行動に移していきたいです。



○当事者であるゲストスピーカーの方の話をお聞きすることができたこと。

私たちが普段何気なく指導していることも、文化やアイデンティティの視点で捉えてみると、とても苦しいことを強いている可能性がある、ということに気づくことができた。

自文化中心主義ではなく、文化相対主義の視点でものごとを捉えたり、子どもたちに接していきたいと感じた。





## C 外国につながる児童生徒の教育 II

### シラバス

年度	科目名	課題領域	単位数		
2023年度	外国につながる児童生徒の教育 II	日本語・教科の力の育成 異文化間能力の涵養	1		
授業の目的	1. 外国につながる児童生徒の実態等に応じ、言語教育に関する専門的知識に基づいて、日本語・教科の教育を行う力を養う 2. 外国につながる児童生徒と、周囲の子どもや社会との相互作用を通して、お互いの異文化間能力を育てる。				
学修目標 (目標とする資質・能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人児童生徒等の受入れ体制・指導体制に応じて、指導・支援を行うことができる。《育む力：ケ*》</li> <li>・第二言語習得や教育方法に関する知識を踏まえ、子どもの年齢的な発達の違いを考慮した日本語や教科の指導・支援をすることができる。《育む力：コ*》</li> <li>・日本語に関する知識を生かして、子どもの日本語の力に合わせた日本語や教科の指導・支援をすることができる。《育む力：サ*》</li> <li>・子どもが新しい環境に適応することを支援できる。《育む力：ソ*》</li> <li>・子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。《育む力：タ*》</li> <li>・子どもの文化間移動の経験や言語的文化的多様性を価値付け、周囲の子どもの学びに結びつけることができる。《育む力：チ*》</li> </ul>				
各回の授業内容					
回	月日	時間	授業テーマ	内容概略	担当教員／ゲスト講師
1	10月28日	午前1 (90分)	児童生徒が学ぶ日本語の特徴について知ろう	日本語指導の内容や段階性を学び、児童生徒らが学ぶ日本語の特徴を理解する。 ▷ G, H	鹿嶋恵 (大学院教育学研究科 特任教授)・藤本典子 (教育学部 客員教授)
2	10月28日	午前2 (90分)	日本語指導担当者による実践に学ぶ(1)	日本語指導担当者の実践例から、個に応じた指導や、連携の重要性、子どもの活躍や多様性を尊重する指導方法を学ぶ。 ▷ I, J	西本聡美氏、山川 幸子氏、藤本るみ氏 (熊本市立黒髪小学校 日本語指導担当)
3	10月28日	午後1 (90分)	日本語指導担当者による実践に学ぶ(2)	インターナショナル・スクール(タイ王国)での日本語指導の実践や、教科につながる日本語支援について学ぶ。 ▷ I, J	村上淳子氏 (鹿屋体育大学 非常勤講師)
4	10月28日	午後2 (90分)	児童生徒が学ぶ日本語の教材を比べてみよう	様々な子ども向け日本語教材を比べて、児童生徒に合わせた指導・支援の在り方や、アレンジの必要性について考える。 ▷ G, H	鹿嶋恵・藤本典子

5	10月29日	午前1 (90分)	児童生徒の発達に合わせた日 本語指導・支援を考えよう(1)	JSLカリキュラムの考え方について理解し、小学生の実践事例を読み解く。 ▷ I, J, H	鹿嶋恵・藤本典子
6	10月29日	午前2 (90分)	児童生徒の発達に合わせた日 本語指導・支援を考えよう(2)	「やさしい日本語」やライト教材の考え方について理解し、教科学習への参加支援について考える。 ▷ I, J, H	鹿嶋恵・藤本典子
7	10月29日	午後1 (90分)	児童生徒の発達に合わせた日 本語指導・支援を考えよう(3)	JSLカリキュラムの考え方について理解し、中学生の実践事例を読み解く。 ▷ I, J, H	鹿嶋恵・藤本典子
8	10月29日	午後2 (90分)	外国につながる児童生徒と学習環境づくり	・外国につながる児童生徒の文化間移動の経験や言語的文化的多様性を、周囲の子どもの学びに結びつける方法を考える。 ▷ J, K	藤本典子・鹿嶋恵
履修条件		今年度は、教員免許の有無にかかわらず、どなたでも受講可能。			
評価の方法		授業への参加、事後アンケート			

\*ア～マの記号は「豆の木モデル」において、外国人児童生徒等教育に携わる教師に「求められる具体的な力」を、また▷A～Nの記号は同じく教員の「養成・研修の内容構成」に該当する。詳しくは、下記文献のpp.5-10を参照。公益社団法人日本語教育学会(2020)『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』(<https://mo-mo-pro.com/report>)

## 実施概要：外国につながる児童生徒の教育 II

### 授業概要

外国につながる児童生徒の教育を担う教師に必要な資質・能力の中の一つ「育む力」を育てる授業である。

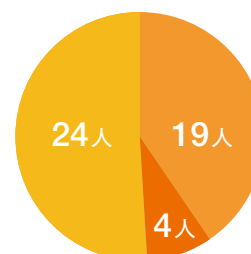
日本語の特徴についての授業の後、日本語指導に携わっている教師の実践報告、それを受けて、教材等を読み解く活動を行った。グループワークも取り入れた。その中で、受講生の積極的な姿勢が見られた。

最後に、多文化共生へ向けての取組や、異文化能力の育成についての授業を行った。外国につながる児童生徒の指導を学校の中心に据えた取組について、実践例を取り入れた授業となった。

### 受講生単位取得状況

受講生53人 単位取得者数47人

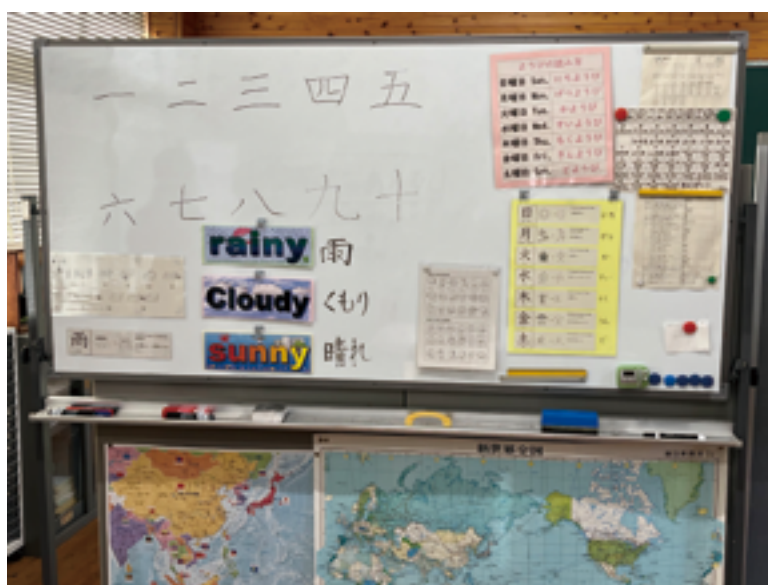
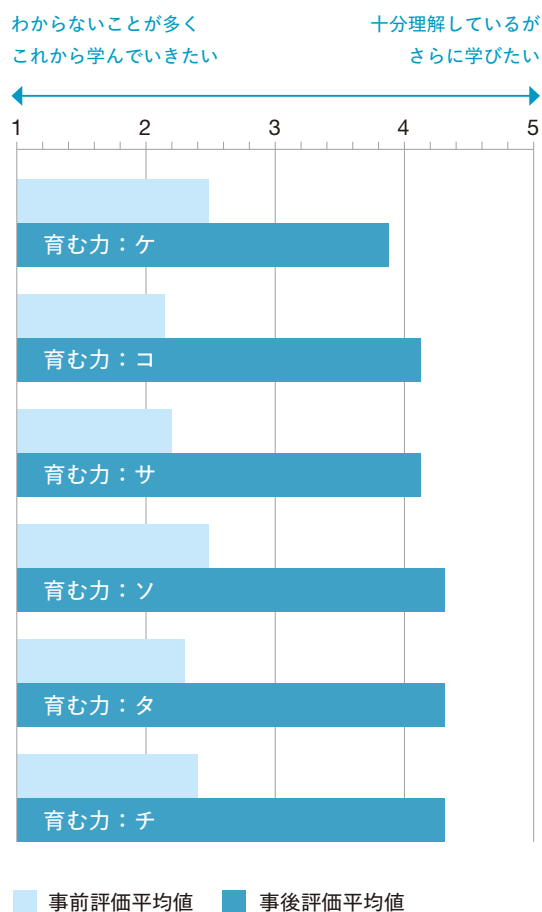
### 授業形態別の受講者数



## 事前の自己評価+事後アンケートの結果

### 学修目標に対する受講生の自己評価の事前・事後の変化（外国につながる児童生徒の教育 II）

- 1 外国人児童生徒の受入れ体制・指導体制に応じて、指導・支援を行うことができる。
- 2 第二言語習得や教育方法に関する知識を踏まえ、子どもの年齢的な発達の違いを考慮した日本語や教科の指導・支援ができる。
- 3 日本語に関する知識を生かして、子どもの日本語の力に合わせた日本語や教科の指導・支援をすることができる。
- 4 子どもが新しい環境に適応することを支援できる。
- 5 子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。
- 6 子どもの文化間移動の経験や言語的文化的多様性を価値付け、周囲の子どもに学びを結びつけることができる。



## 授業参加者の声

○「JSLカリキュラム」と聞いたときは、モデルになるカリキュラムがあるのかと思っていた。講義を聞いてカリキュラムを作るのは教師自身であることがわかった。

子供一人一人の実態や置かれている環境が違うので、一人一人カリキュラムが違うのも当然であろう。カリキュラムを作成していくためには、まず子どもの実態把握をしっかり行う必要がある。

また、学習で躓きそうなところを的確にとらえる力も重要となる。概念、用語、日常とは違う特別な意味でつかわれる言葉、行動・指示の言葉などのように分析的にとらえるようにしていきたい。学びの内容も大切だが、一人で学べるようになるように学び方を身につけさせることが重要であることを忘れずにおきたい。

リライト教材については、なかなか自作は難しいと感じた。まずはいろいろなリライト教材を読んで、ねらいによる書き方の違いなど研究していきたい。



○外国の子供たちを受け入れることが、学校の日本の子供たち、職員、保護者、地域をつなげ、互いに成長していくことになることをいつも意識して実践を頑張っていると思った。

## D 外国につながる児童生徒の教育 III

### シラバス

年度	科目名	課題領域	単位数		
2023年度	外国につながる児童生徒の教育 III	学校づくり 地域づくり	1		
授業の目的	1. 保護者や地域の関係者と連携・協力して、よりよい支援、教育のための学校体制づくりを考える。 2. 異なる立場の人々と協働しながら、学習環境としての地域づくりを考える。				
学修目標 (目標とする資質・能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の支援活動団体等、学校外の様々な関係者と連携し、支援体制を構築することができる。《つなぐ力：ナ*》</li> <li>・学校が拠点となり、地域の様々な関係者と連携して、子どもの学習環境を豊かにすることができる。《つなぐ力：ニ*》</li> </ul>				
各回の授業内容					
回	月日	時間帯	授業テーマ	内容概略	担当教員／ゲスト講師
1	12月23日	午前1 (90分)	外部機関・地域との共通理解 や連携を深めるために(1)	外国につながる児童生徒および保護者への支援の充実に向けた外部機関・地域との連携について学ぶ。 ▷ C, L	藤本典子(教育学部 客員教授)・ 鹿嶋恵(大学院教育学研究科 特任教授)・ゲストスピーカー
2	12月23日	午前2 (90分)	学校経営における効果的な リーダーシップの発揮について	外国につながる児童生徒やその保護者を抱える学校において、管理職と教職員らが発揮すべきリーダーシップ・フォロワーシップの理論と方法について知識を深める。 ▷ C, L, N	波多江俊介 (大学院教育学研究科 准教授)
3	12月23日	午後1 (90分)	小学校での実践例(1) ～日本語教室と担任との連携 を密にした学校づくり～	熊本市内の日本語指導センター校での取り組みから、校内の指導体制や、支援の実際等を学ぶ。 ▷ A, C, L	寺前研太郎氏 (熊本市立黒髪小学校 校長)
4	12月23日	午後2 (90分)	小学校での実践例(2) ～地域との連携を土台とした 実践～	熊本県の拠点校における、外国につながる児童の受入れ実践例から、日本語指導の位置づけや地域との連携のあり方等を学ぶ。 ▷ B, C, L	梶原圭一氏 (菊陽町立武蔵ヶ丘小学校 校長)
5	12月24日	午前1 (90分)	日本語指導の充実に向けて	熊本市教育委員会の日本語指導に対する施策や、大学との連携による児童生徒の支援策等について、知識や理解を深める。 ▷ A, B, C	浅井弘美氏 (熊本市教育委員会指導課 日本語指導担当 主任主事)

6	12月24日	午前2 (90分)	外部機関・地域との共通理解 や連携を深めるために (2)	社会教育の立場から、外国に つながる児童生徒や保護者等 の学習や支援を地域社会でど のように創出していくべきか、 鹿児島の事例を元に考える。 ▷ A, L	山下直子氏 (鹿児島大学 非常勤講師)
7	12月24日	午後1 (90分)	地域の支援団体による日本語 指導や支援の実践例	熊本県からの委託も受けて、 県内全域で外国につながる児 童生徒への日本語指導や学習 支援等を幅広く展開する NPO の活動を学び、学校環境づく りや地域社会づくりを考える。 ▷ A, E, K, L	竹村朋子氏 (NPO法人 外国から来た子ども 支援ネットくまもと 代表)
8	12月24日	午後2 (90分)	共に育つ ～子供たちの社会参加とキャ リア教育～	・これまでに日本語指導を受け てきた児童生徒の作文を元に、 これからの一人一人の取り組 みの意義を確認する。 ・学習の振り返りとまとめを行 う。 ▷ E, L, N	藤本典子・鹿嶋恵
履修条件		今年度は、教員免許の有無にかかわらず、どなたでも受講可能。			
評価の方法		授業への参加、事後アンケート			

\* ア～マの記号は「豆の木モデル」において、外国人児童生徒等教育に携わる教師に「求められる具体的な力」を、また▷ A～Nの記号は同じく教員の「養成・研修の内容構成」に該当する。詳しくは、下記文献のpp.5-10を参照。公益社団法人日本語教育学会（2020）『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』（<https://mo-mo-pro.com/report>）

## 実施概要：外国につながる児童生徒の教育 III

### 授業概要

外国につながる児童生徒の教育を担う教師に必要な資質・能力の中の一つ「つなぐ力」を育てる授業である。

そのためにこの授業では、まず、概論「どうして連携・協力が必要なのか」を課題として取り上げ、「外国につながる児童生徒の課題が多岐にわたっていること」「児童生徒の課題を解決するためには、児童生徒を取り巻く学校・関係機関・地域が連携して、よりよい環境づくりを進める必要があること」の授業を行った。

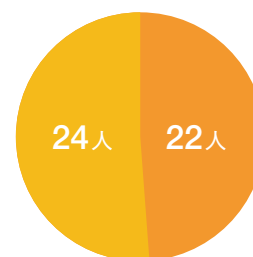
その後、熊本大学の教授による専門的な講話、学校管理職の学校づくりの実践、教育委員会の対応、社会教育の立場からの関わり、NPO法人の関わり等を聞く授業を行った。

最後に、外国につながる児童生徒に、将来につながるキャリア教育の充実についての授業を行った。

### 受講生単位取得状況

受講生52人 単位取得者数44人

### 授業形態別の受講者数

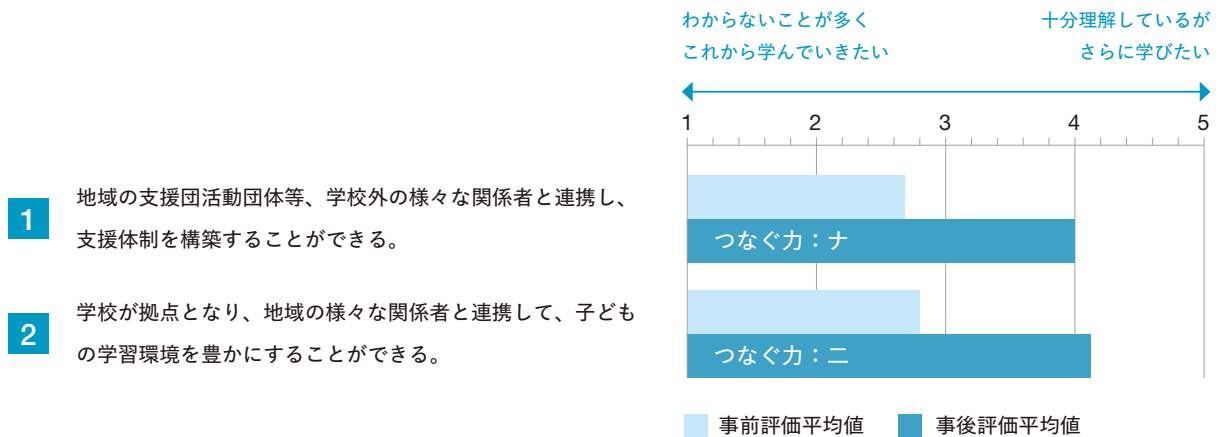


対面受講      オンデマンド受講



## 事前の自己評価+事後アンケートの結果

### 学修目標に対する受講生の自己評価の事前・事後の変化（外国につながる児童生徒の教育 III）



## 授業参加者の声

○印象に残ったことが2つあります。

1つは、県や市、学校の組織的な取り組みがどのように構築され、進められているかについて知ることができてよかったです。特に、校内研修での共通理解、組織だった取組、また、県や市の行政との連携、センター校や拠点校としての連携、地域の関連機関との連携など組織づくりに関して、よくわかりました。

2つ目は、仲間づくり、居場所づくりです。これは、外国につながる児童たちだけでなく、いろいろな環境の方々や同種の障害を持った方々の仲間づくり、あるいは、最近社会教育の一環として公民館活動のように取り組まれつつある「子供の居場所づくり」などにも通じるところがあると思いました。

ロールモデルを見たり、ピアカウンセリングのような場を持つことで、自分と似たような境遇にある人たちがどのように自分を肯定的にとらえ、誇りを持って生きているかを知し、自己肯定感を持ったり、自分の家族や背景にある国や文化に誇りを持ったりすることができると思いました。



## シラバス

年度		科目名		課題領域		単位数	
2023年度		教育実践研究		学校での観察実習		1	
授業の目的		1. 学校現場において、外国につながる児童生徒の受け入れ体制、日本語指導、JSL等、指導や支援の実際を観察する。 2. 観察を通して、外国につながる児童生徒の指導や支援の方法を考える。					
学修目標 (目標とする資質・能力)		学校や児童生徒の実態に合わせて、適切な指導・支援や児童生徒との関わり方を考えることができる。					
各回の授業内容							
回	月日	時間帯	授業テーマ	内容概略	担当教員／ゲスト講師		
1	2023年 11月16日	30分	事前指導	現場での観察実習の前に、留意点や、観察の観点等を学ぶ。 ▷ I, M	鹿嶋恵 (大学院教育学研究科 特任教授)・藤本典子 (教育学部 客員教授)		
2	2023年 11月～ 2024年 1月	3時間	日本語指導センター校等における実習 (1)	実習校内の日本語指導教室や在籍学級において、日本語学習や教科学習、学習支援等の観察実習を行う。5校より3校を選択して参加。 ◇実習校：熊本市立桜山中学校、熊本市立帯山中学校、熊本市立楠小学校、菊陽町立武蔵ヶ丘小学校、熊本市立黒髪小学校 ▷ J, M	実習校の担当教員、藤本典子・鹿嶋恵		
3		3時間	日本語指導センター校等における実習 (2)				
4		3時間	日本語指導センター校等における実習 (3)				
5	2024年 2月4日	90分	事後指導 (1)	観察実習で得た成果を振り返り、気づきや成果を共有する。 ▷ M, N	藤本典子・鹿嶋恵		
		60分	事後指導 (2)	「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ～Ⅲ」で得た成果を振り返り、気づきや成果を共有する。 ▷ M, N	藤本典子・鹿嶋恵		
履修条件		教員免許保有者に限る。また「教育実践研究」のみの部分受講不可。必ず「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ」「同Ⅱ」を併せて受講すること。					
評価の方法		授業への参加、事後アンケート					

▷ A～Nの記号は「豆の木モデル」において、外国人児童生徒等教育を担う教員の「養成・研修の内容構成」に該当する。詳しくは、次の文献のpp.5-10を参照。公益社団法人日本語教育学会 (2020)『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』(<https://mo-mo-pro.com/report>)

## 事前・事後指導の概要

### 1. 事前指導の概要

実習日までの日程が短く対面授業日の設定が難しかったため、事前指導は全員オンデマンド形式での受講（動画視聴）となった。主な内容は次の通りである。1) 観察実習全体の目的、2) 観察実習の構成と内容、3) 観察実習のポイントや視点：日本語教室での場合、4) 観察実習のポイントや視点：在籍学級での場合。全体的な留意点として、自分が何を見たいかという焦点を予め1つは決めておくこと、また事後指導での活動に向けて観察記録を取ること。

### 2. 事後指導の概要

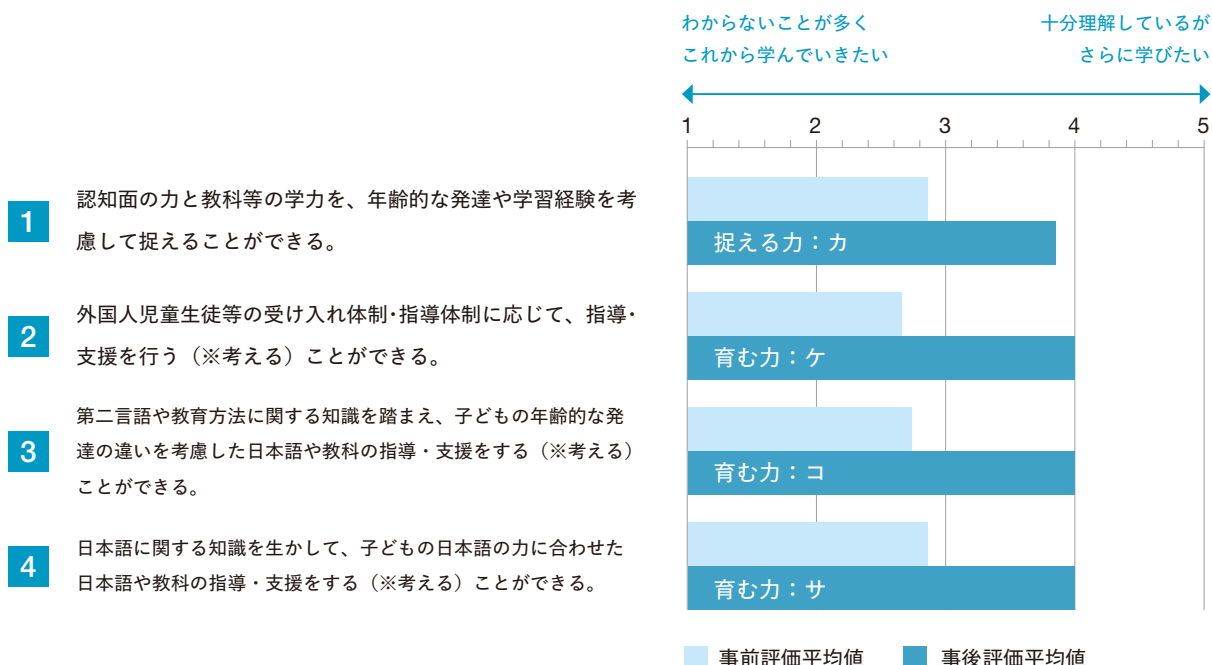
#### ◇事後指導(1)の概要

観察実習した学校ごとに分かれて学びを確認し、学校現場での外国につながる児童生徒の受け入れ体制、日本語指導、JSL等、指導や支援の実際をまとめた。学校ごとの発表を通して参観しなかった学校の取組を知ると共に、学びを今後どう生かしていくか考えた。

#### ◇事後指導(2)の概要

下記の4部会に分かれて「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ～Ⅲ」学びを確認し、今後取り組んでいきたい内容を検討、共有した。a) 小学校低学年部会、b) 小学校高学年部会、c) 中学校・高等学校部会、d) 特別支援学校・特別支援学級部会。

### 学修目標に対する受講生の自己評価の事前・事後変化（教育実践研究）



## 実施概要：教育実践研究

### 現場における実践 1

## 熊本市立桜山中学校

### [学校の概要]

平成24年1月1日本語指導教室設置（市中学校日本語指導センター校になる）。黒髪小学校とともに、熊本市の教育国際化推進連絡協議会の中心として外国につながる児童生徒の教育の中核を担う。令和5年度から小学校と中学校のセンター校が黒髪小学校1校に統合される。現在1名の日本語指導教師（センター校在籍）が日本語指導を担当している。

### [期日・時間]

令和5年11月29日（水）8:55～12:55

### [参加人数]

26人

### [内容]

#### 1 校長講話～学校の日本語指導の取組～

#### 2 観察実習1 日本語教室授業観察

指導者 日本語指導担当教師 宮永直子教諭

#### 3 観察実習2 在籍学級授業観察

1年2組（数学） インドネシア（ジャカルタ） 中1 令和5年4月中旬来日

2年2組（英語） エジプト 中2 令和5年6月下旬来日

#### 4 学び合いの時間・質疑応答（主な内容）

—日本語指導教室での、賞賛・細やかな誉め言葉・安心して学習できる環境

—日本語指導教室の教室経営

—在籍学級でのほかの生徒との良好な人間関係

—学習意欲が低い生徒に対する取組

—学校全体のネットワークの構築

—教材の選定と購入

—SC等との連携



学び合いの時間の様子

## [受講生の振り返りより]

○今回の桜山中の観察実習において、私が学んだことが3つあります。1つ目は「授業のリズム」の大切さです。学習項目が機能的に配置されることで、学習者が学習意欲を持続しつつ、効果的に学習内容を習得できるということです。例えば、漢字の学習がホームワークの課題として提示され、次回の確認テストとして行うことで、学習者が自身の漢字の習得を実感できます。2つ目に「生徒とのやり取り」の重要性です。テキストの内容に沿いながらも、学習者の生活体験と結びつけることで、語彙や文法の記憶をより定着できるような関わりが数多く見られました。3つ目に「教師の使命」についてです。来日のきっかけや来日時期はまちまちですが、個々の実態に合わせて、「将来、日本でしっかりと生活ができるための日本語の力を高める」という思いが伝わってきました。「子どもたちの大切な人生をあずかっている」との責務をもつこと、共生社会の実現のために、私たち一人一人が当事者意識をもって取り組むことの重要性を実感できました。



観察実習

○日本語指導を日常的に行う教室には、様々な工夫があった。曜日や日付の特有の言い回しなど、掲示物も活用しており、生徒の日常と日本の日常をリンクさせてあるのはとても有効だと感じた。授業については宮永先生ができたことに対してたくさん褒めておられたことが印象的だった。また、生徒をよく観察して「わからない」という直接の言葉に頼るのではなく、反応や様子から補足をされていたことは生徒との信頼も高まると感じた。学級においては外国につながる生徒と日本育ちの生徒が関わるような座席配置がされていて、当たり前にも異文化交流が行われていることについて、ご苦労はあると思うがうらやましくも感じた。言葉の壁に関しては今は生徒の手元にタブレットがあることで負担感の軽減ができ、有効活用できると感じた。学校全体で教師一人ひとりが10分ずつでも関わっていければということが心に残った。誰かが無理することなく生徒が伸びていく環境作りを考えていきたい。

## 熊本市立帯山中学校

### [学校の概要]

熊本市の中心部に位置する創立65周年の中学校。創立50周年の頃は、日本一生徒数が多いというマンモス校であった。現在生徒数は937名。近隣の拠点校の日本語指導教師による指導が行われている。

### [期日・時間]

令和5年12月4日(月) 8:50～12:20

### [参加人数]

26人

### [内容]

#### 1 観察実習1 日本語指導教室授業観察

指導者 日本語指導担当教師 安田享子教諭

「～になります」を使って、状態変化を表すことができる。

#### 2 学校紹介～学校の日本語指導の取組～

・講話(1) 中学生への日本語指導

#### 3 観察実習2 在籍学級授業観察

1年生国語 古典「竹取物語」

#### 4 学び合いの時間・質疑応答 (主な内容)

— 在籍学級の教科指導と日本語指導教室の指導との関連

— 生徒に直接関わる担任・日本語指導担当教師・学級支援員との連携

— 一人一人の日本にきた背景・心情にどのように寄り添っていくか

— 日本語指導と文法との関係

— 在籍学級での支援員の支援と他の生徒との関わり

— 外国につながる生徒への古典の指導の在り方



日本語指導担当教師による講話



## [受講生の振り返りより]



学び合いの時間・質疑応答

○日本語指導教室を参観し、感銘を受けた。参観にあたっては、スキファールディングに注意していたが、1時間の授業の中に、マクロの部分とミクロの部分を意識しながら、適切に指導されていた。この授業から、足場かけとはこういうことだと理解できた。特に、教科指導との足場かけは参考になった。理科の状態変化という一種のテクニカルタームを、日本語指導の中に取り入れられており、普段から生徒の実態を把握するためにアンテナを高く持っておられるのだと感じた。

○実際に個別指導をされているところを参観できて、随所に担当教諭の生徒への気遣いが垣間見えた。初めは生活の質問で、日にちや天気から始まり、行事や家族のことも確認し、寄り添う姿があった。次のテキスト学習は、イラストを見ながら状況変化の説明練習。「短くなりました」「長くない」反対は「長くなりました」など、いろいろな言い方や発展的内容に広げていくことで、生活の中で使える表現がさらに増える。この細やかな支援こそが、これからの学習の発展へとつながるのだろう。その後の授業参観・協議では、教科担当と支援員、日本語担当教諭と学級担任の連携について、注目が集まった。私の班では、「ノートを作って気軽に書き込む」や「タブレットの共有ツールを使う」など、具体的な方法についての意見もでた。一人の生徒に関わる大人たちが情報共有をスムーズに行って一人一人に寄り添い、力を伸ばせるように支援していくことが大切だと実感できた。

## 熊本市立楠小学校

### [学校の概要]

熊本市北部に位置する児童数270名の小学校。今年度より日本語指導拠点校となった。外国につながる児童2名が在籍。日本語指導教師2名加配。

### [期日・時間]

令和5年12月12日(火) 8:30～12:05

### [参加人数]

25人

### [内容]

#### 1 観察実習1 在籍学級授業観察

「こえにだしてよもう おとうとねずみチロ」1年1組 国語

#### 2 観察実習2 日本語教室授業観察

指導者 日本語指導担当教師 北原 和孝教諭

「とれが いちばん たかいですか」(比較表現)

#### 3 校長講話～学校の日本語指導の取組～

#### 4 学び合いの時間・質疑応答(主な内容)

—受け入れ体制の重要性 学校として・学級として

—在籍学級担任と日本語指導教師の連携

—拠点校の役割

—教材の紹介

—評価について



観察実習1

## [受講生の振り返りより]



観察実習 2

○今回、初めて外国にルーツのある児童の学習の様子を参観することができた。在籍学級においての国語の授業では、自作のワークシートや、情景をイメージしやすくするための手描きの図、子どもたちの言葉の引き出しを増やし、豊かな表現につなげるために気持ちの表現を選択式で提示するなど、一斉指導の中にきめ細やかな支援が多々あり、該当児童だけでなく、全ての児童の学びを豊かにする、UDの授業を参観させていただくことができた。

日本語指導では、2つもしくは3つ以上の比較表現の使い分けを指導されていた。普段あまり意識することなく使い分けをしている表現が、日本語を学ぶ児童生徒にとっては難しい、丁寧に学ぶことが重要なのだと知ることができた。また、児童とのやりとりを中心に置きながらも、書字練習の時間を毎時設定されており、1コマの授業の中で、「話す・書く・聞く・読む」全てを網羅した授業を参観させていただき、大変参考になった。

学び合いの時間では、保護者とのやりとりの実際、通知表などの評価のあり方、チャットなどを用いた情報共有、連携の仕方など、多くのことを学ぶことができ、大変有意義な時間だった。特に印象に残ったことは、1年女兒と言葉を交わすことができるようになったのは2学期からで、1学期は話すことはとても少なかった、ということだ。

在籍学級の国語の授業の音読でも、自ら挙手をし、みんなの前で堂々と音読をしていたため、そのような姿もあったのだと知り、驚きとともに、先生方、保護者、何より本人の「学びたい」「伝えたい」という強い思いを感じ、胸が熱くなった。「日本に来たときは日本語は分からなかったけど、今は『分かります』』と言ったときの彼女の笑顔を見て、「言葉を獲得することは世界が広がること」、そして、日本語指導の大切さを改めて感じることができた。言葉が分からない、思いが通じない、不安な気持ちでいっぱいの子どもたちが、学んだことで言葉を獲得し、コミュニケーションをとることができてよかったと感じることができるよう、今後も日本語指導について深く学んでいきたい。

## 菊陽町立武蔵ヶ丘小学校

### [学校の概要]

1980年代より、帰国された中国在留邦人の2世や3世の方が、県営武蔵ヶ丘団地に入居された。それ以来、中国をはじめアジア諸国に対する差別意識から起こるできごとを学校の大きな課題ととらえ、日本語を理解できない子供への教育支援を含め反差別の取組を進めてきている。令和5年度より県下で初めての日本語指導拠点校となった。日本語指導加配2名。

### [期日・時間]

令和5年12月13日(水) 8:40～12:15

### [参加人数]

21人

### [内容]

#### 1 観察実習ⅠⅡ 在籍学級授業観察

1年1組 国語 「モチモチの木」

#### 2 学び合いの時間・質疑応答(主な内容)

- これまでの学校の取組の歴史・現在とのつながり
- 転入後の支援の充実
- 学校全体の支援計画の作成(関わりの見える化)
- 多文化共生への取組、学校行事の紹介
- 地域との関わり～地域の願いと学校経営～



観察実習



学び合いの時間・質疑応答



校長講話

## [受講生の振り返りより]

○現地学習を通して学んだことは三つある。一つ目は、子どもが前向きになる言葉かけである。個別の日本語学習で、子どもが何かを言えるようになった際に必ずと言っていいほど賞賛の言葉をかけられていた。外国から来た子どもたちにとって、第二の言語を一から学ぶことはとてもハードルが高い。ソフトの面から子どものやる気や安心して学習できる環境を整えることは土台として必須であると改めて感じる事ができた。

二つ目は、日本語学習において、派生的な学習の在り方である。ある例文に対して、日常生活のことに置き換えて例文を組み立てたり、単語を入れ替えたりして、子どもと楽しく学びが進行されていた。学んだ例文を日常に置き換えて、どんな場面で活用できるのか、または、例外的言い方はないのかなど、効果的に学びを構築しながら授業が進められる点に学びが多かった。

また三つ目は、学校全体でのサポート体制である。日本語教室担当の先生だけでなく、教育支援員が充実しており、ポケットークを活用して言語の壁を低くしてあり、教員と子ども双方にとって充実した支援と教育の場が整っているのだと感じることができた。また校内研修で外国人を受け入れるための研修を組んで、組織として対応されている点もとても勉強になった。

○本日の武蔵ヶ丘小学校の観察実習では、まず小3のフィリピンにルーツを持つ女児の取り出し授業と、インドネシアにルーツを持つ女児の共育ち教室での日本語指導の授業を見学させていただいた。どちらの授業も温かい雰囲気の中で児童が安心して授業を受けていた。支援を必要とする子どもたちが急速に増えていく中で、武蔵ヶ丘小学校では各学級の時間割を調整し、少しでも十分な支援が受けられるように工夫されていた。更にハード面や支援体制面を整えるために管理職の先生を中心に、日本語の指導や保護者の支援のために先生方だけでなく、支援員、ICT支援員が協力し合いチームとして動いていた。グループの話し合いの際に、ある学校の先生が、「困っている生徒がいても一体その状況をどこからだれが変えていけばいいのか。生徒が孤立している姿を見るに堪えない。どうにかしたいと思ってこの講座を受けた。」とおっしゃっていた。私たちがつながりあって、少しでも子どもたちの笑顔を増やせるアクションが起こせるようになりたいと強く感じた。

## 熊本市立黒髪小学校

### [学校の概要]

平成11年に文部省指定「外国人子女教育受入地域推進地域センター校」となり、平成15年には、文部科学省指定「帰国・外国人児童生徒とともに進める教育の国際化推進地域センター校」となる。さらに平成24年 熊本市立桜山中学校とともに「教育国際化推進センター校」となった。令和5年より、熊本市における唯一のセンター校に指定されている。日本語指導教師4名在籍、日本語指導支援員2名在籍。

### [期日・時間]

令和6年1月26日（金）9:00～12:30

### [参加人数]

24人

### [内容]

#### 1 校長講話～学校の日本語指導の取組・本日の授業の紹介～

#### 2 観察実習1 日本語教室授業観察

指導者 日本語指導担当教師 西本聡美先生

「動詞の過去（～ました）」を使って、過去の行動を音声と文字であらわすことができる。

指導者 日本語指導担当教師 山川幸子先生

「～してください」の依頼の文を生かして、話したり書いたりすることができる。

指導者 日本語指導担当教師 藤本るみ先生

主語と既習の動詞、交通手段の助詞「で」を組み合わせて文をつくり、書くことができる。

#### 3 観察実習2 在籍学級授業観察

1年1組 算数「100」をこえるかず

#### 4 学び合いの時間・質疑応答（主な内容）

——児童の実態に即した指導法について

- ・説明するのではなく、繰り返し発語させて身につけさせていく。  
その中で、日本語のルールについて気付いていく方法をとっていること
- ・カードを使った指導
- ・知っている内容を生かした指導

——教具・教材についての紹介 これまで積み上げられてきたものとそれぞれの児童の実態に合わせたもの

——在籍学級の支援について センター校としての人的配置について



## [受講生の振り返りより]



観察実習 1



○まず感じたのは、日本語教室・一斉授業ともに授業規律がしっかりしているということだ。そのため、日本語教室で広くはない空間に3人が3様の学習をしてそれぞれ話したり時に歌ったりしていても、自分の学びに集中できていた。一斉授業でも、多様な児童集団を担当の先生が上手に導いておられた。

日本語教室の教材選びや教材教具づくりは、限られた時間の中で本当に大変だと思うが、先生方もおっしゃっていたように楽しい作業だと感じた。児童の実態や興味関心を的確に把握し、1対1の濃密な関わりの中で日々成長を感じられるのは素晴らしくやりがいがあると思う。6年生の女兒について、教室での他の子供とのコミュニケーションはどんな様子だろうか、日本にはどのくらいいる予定なのか、将来の夢や進路はどのように考えているのだろうか、など気になってしまった。

一斉授業では、外国につながる子供が注目される場面を自然な形で作られたことが素晴らしいと思った。また、支援員の助けとともに、近くの子供たちとの学び合いがあり、日頃からこのような関わりがあっているのだろうと感じた。

日本語指導の拠点校として、長年の実践成果の蓄積と、一人一人を大切にされた指導に学ぶことが多い実習だった。

## F 成果発表会

[期日・時間] 令和6年2月4日(日) 13:30～16:10

[参加人数] 40人(対面受講16人、オンデマンド受講23人)

[内容] 「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ～Ⅲ」と「教育実践研究」の振り返りとまとめ  
受講者の発表の一部を以下に紹介する。



○この教育実践研究では、実際現場に出向き学んだことを参加者と共有することにより、似たような気づきや学びがある部分と視点と違う部分があることに気付かされ、学びが深くなった。

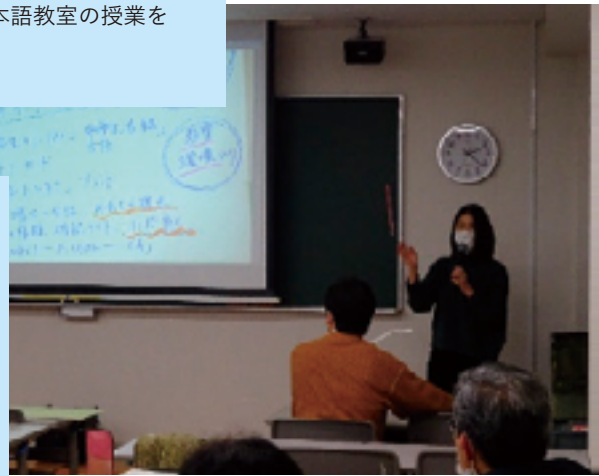
○校種別の話し合い活動が印象に残った。これまで、プログラムに参加し、座学だけでなく実習でも知識を得たが、グループでの意見が「UD」を意識した学級・授業づくりが大切だということに意見がまとまった。日本人が在籍する通常学級や特別支援学級で意識していくものという認識があったため、外国人児童という呼び方があるだけで、根本的な指導の在り方に差はないことを改めて実感した。外国にルーツをもつ児童のプログラムを受けているが、この活動を通して、自分が今持つ学級での児童への自分の関わり方をふり返った時間でもあった。



○同じ授業を参観しても、参加者それぞれの視点があり、勉強になった。外国をルーツに持つ児童・生徒が、日本で生活するのに私たちが思う以上の苦労やむずかしさがあり、だからこそ周りにいる大人が支えてあげなくてはいけないと思った。

○今回の対面授業に残念ながら参加できなかったが、受講生の発表シートを見ながら、これまでの講義や観察授業を振り返る機会となった。観察授業の振り返りを通して、講義内容の理解が深化した。特に、「日本語プログラム」の組み合わせの講義内容について、日本語教室の授業を観察することで、多くの内容が腑に落ちた。

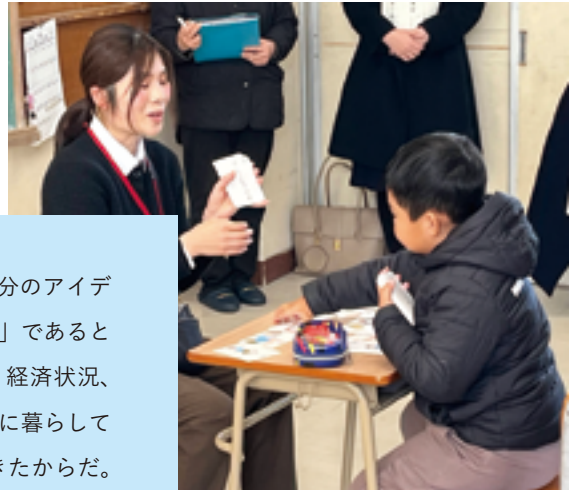
○印象に残ったことは、グループごとの学びあいとそれぞれの発表である。様々な立場の方の、授業に対する受け止め方を知ることができ、より多くの視点から深く学ぶことができた。自分が感じたことを発信することにより、自分が得た知識や感じたことをまとめることができた。



○観察実習に参加した先生方と一緒に、振り返りをまとめたことがとても良い学びになりました。自分は、日本語指導の実践がほとんどないので、日常的に指導をされる先生方の技術的なことに視点を当てて見ていましたが、他の先生方は特別支援の観点から見ていたり、情意面から捉えたりしているなど、「なるほど、こういう視点もあるのか」と自分の視点が増えたように思います。文化間移動をしてきた子どもたちがいかに安心して過ごすことができる環境をつくるかについて、改めて考えることができました。

○観察実習に行った学校毎に分かれてグループを作り、それぞれでまとめて発表する方法は、短い時間で内容を整理し、要点をまとめ、一度に共有できる良い方法だったと思います。共に学んできた先生方の視点だったことが、とても親近感の持てる内容で、共感しやすく勉強になりました。後半の校種別に分かれ、日本語教育の課題についての考えを出し合った発表では、特別支援教育コーディネーターができて各学校に配置されているように、今後は「日本語指導コーディネーター」を制度化し、人員を増やすべきということ、教科研修があるように、「日本語指導」の研修もすべきだという意見にとても共感できました。また、私は高校に努めていますが、日本語の読み書き能力は伸びて生活言語能力は身につけてきても、それと学習言語能力とは別で、さらに高度な内容を学ぶには相当の日本語力が必要なのだということを生徒を通じて理解できました。その中で生徒が「わからない」と教科担当者に言える関係性、また、教員側もこの二つの言語能力には違いがあることを理解しながら、外国につながる生徒に根気強く教えていく必要があると感じました。

## G 受講生の声～学びを広げて～



○今回の講義の大義は、「外国につながる児童生徒が自分のアイデンティティを大切に、自分らしく幸せに暮らせること」であると感じている。しかしそれ以上に、「国籍、人種、文化、経済状況、特性等は関係なく、目の前のすべての子どもたちが幸せに暮らしていけるように」という教育の根本に立ち返ることができたからだ。私は教師として参加しているが、他の立場であっても、今の日本に必要な見識を広げることができると考えている。

○今回の研修に参加された方の勤務先が、幼稚園、小学校、中学校、高校、公民館と様々、かつ教職の経験年数も様々、そして教諭、教頭、校長といった立場も様々。また日本語指導の経験がある先生から私のように見たこともない人までと、日本語指導の経験も様々。これほど多様な先生方と、約半年にわたって一同に会って学習できたこと、正直今までに経験したことがありません。いつも多様な先生方の意見にびっくりしていました。裏を返せば、外国につながる子どもに対して、「なんとかしなければ」と思っている先生方が多いということがわかりました。そしてそれぞれの立場を活かしながら、多くの人とつながり、ネットワークを作っていくことこそが、課題解決の道すじであることを学びました。今まで以上に、多くの先生方とつながりを持って、外国からきた子どもたちを笑顔で迎え入れることができる教師になりたいと思いました。学び多いこの機会を設定していただき、感謝しています。

○今後、熊本市の日本語指導の重要性は、益々上がるのではないかと思います。現状、小中学校の教員の「日本語指導担当」という位置が、非常に低いことを感じるときがある。その一つに、日本語指導という内容の専門性を、指導教員も教育委員会も、低く見積もっている可能性を否定できない。このプログラムを受講したら、即戦力になるわけでも、意識改革が即行われるわけでもないのだろうが、確実に一石を投じた、素晴らしい内容のプログラムだと思う。来年も続けていただけるようで、嬉しく思う。





○目の前にいる生徒たちが幸福な未来を思い描けるために、今自分が何をしなければならないのか、どのような意識を持って対峙していかなければならないのかを考えるいい機会となりました。支援を必要としている生徒は外国につながる生徒だけではないので、担当するクラス全体の生徒たちの幸福感を増す、安心できる学習環境の構築に向け、自分のできることをやっいていこうと思いました。また、そのために必要な知識を十分得ることができました。頭の中で整理して、授業準備、環境整備に向けて最大限の努力をしていきます。このような機会を頂けて心から感謝しております。ありがとうございました。

とても良い学びとつながりの場を提供していただきありがとうございます。八幡先生に教えていただかなければこのプログラムの存在を知らず、学ぶことができませんでした。もし、私学の参加も想定していただいていたならば、私立学校・幼稚園には熊本県子ども未来課から各種案内が届きますので、来年度以降も事業が継続される場合は子ども未来課経由での周知が良いかもしれません。幼稚園に関しては、経営層や管理職を対象とするのが良さそうです。

○どの講義に参加しても、新しい見識を得ることができ、とても充実した内容でした。今後もこの分野へのニーズはますます高まっていくと思われるので、継続して続けてほしいです。また、今回のプログラムを受講して、日本語指導の免許を取得したいと考えるようになりました。

○本プログラムを受講したい、と考えている方にとっては、非常に学びの多い研修になると、私自身受講させていただいて感じています。日本語指導に関して、未経験ですが、知識や理論的なことを講義で教えていただき、すでに最前線で実践されている方々の講話を聴くことができ、さらに実践校で児童生徒の見学もさせていただき、毎回学ぶことばかりで、大変ありがたいです。



# 4. 先進事例・海外調査の取り組みについて

## 台湾視察目的

台湾の教育や文化について、現地を訪問して視察を行うことにより、台湾ルーツの児童生徒の台湾における学びの状況を把握し、台湾のみならず、日本の学校で学ぶ外国につながる児童生徒の教育を考える際に検討すべき知見を得る。また、そうした知見を本プログラムにおける短期（履修証明）プログラム、オンサイト研修の内容充実に生かす。

## 台湾視察訪問日程

	内容
1日目	出発（福岡→台北）
2日目	①文湖小学校英語授業（音楽）の見学&交流 ②西湖中学校英語による「健康教育」の授業の見学&交流 ③徳明大キャンパス参観及び特色教室見学 ④英語コースの英語授業参観
3日目	日本語専攻の高校教育（日本語教育授業）見学と交流
4日目	帰国（台北→福岡）

参加者は以下の8名。

熊本大学大学院教育学研究科	教授	松永 拓己（団長）
熊本大学大学院教育学研究科	教授	楊 萍（副団長）
熊本大学大学院教育学研究科	准教授	本吉 大介
熊本大学大学院教育学研究科	准教授	波多江俊介
熊本大学大学院教育学研究科	技術部 専門職員	西本 彰文
熊本大学教育学部附属小学校	教頭	岩永 聡
熊本大学教育学部附属中学校	校長	山本 一雄
熊本大学教育学部附属特別支援学校	教諭	辻 清美



## 視察内容

### 教育面について

#### ○小学校（文湖国民小学校）

音楽と地震避難訓練についての安全の学習が関連づけられた授業内容だった。2年生ということで、英語教育と、音楽教育、地震避難訓練を上手くからめて、動きの中でリズムを体得し、英語の会話を身に着け、非常時の訓練ともする工夫が素晴らしかった。26のアルファベット習得済の小学校2年生であり、この授業はかなり高レベルの授業と思った。

特別支援を要する児童への配慮も見られ、5つのグループに分け、正解出来ると倍の得点を黒板に集計表示し、積極的にグループで授業参加を促す工夫もなされていた。

#### ○中学校（西湖実験国民中学校）

家庭科授業での英語教育であった。家庭科の調理を英語で学び、実技に結び付けていく実践的な授業の工夫が素晴らしかった。授業内容は月餅の作り方についてであった。各工程の写真を示し、その工程を示す英語を用い、工程に必要な道具についても英語で取り上げていた。クイズ形式なので、テンポよく授業は進んでいた。

授業はあくまでも調理の内容であり、生活関連の実用英語に興味関心を持ってもらうのが目的であり、知識理解に必要な内容は母国語で確実に教え、習得度評価は家庭科の内容のみである。

授業参加態度の評価として、発言した学生にポイントシールが与えるといった意欲を喚起する工夫がなされていた。現在のところ、進学関連教科以外を英語で授業を行うとの説明があった。

#### ○高等学校（私立 稲江護家高校）

日本語の文法に関する内容であった。述語の肯定形、否定形、普通形、丁寧形の説明と練習を黒板中心で行う授業であり、生徒とのやり取りに終始リラックスした雰囲気を感じた。日々の授業の様子を見せていただいたことが分かる。

#### ○大学（徳明財經科技大学 応用外国語学科）

大学から日本語を学び始める学生が半数を占めるため、学習開始時は比較的「やさしい(簡単な)内容」を扱っている、とのことで、かなり日本語が出来る生徒と初めての生徒が混じり、難しい授業運営であることがうかがわれた。英語の授業は文法の授業であり、日本での教育とあまり変わりはないと見受けられた。

日本語を学ぶ動機について学生達から伺ったところ、日本のアニメ、食べ物、自然風景、芸能人、歌などが好きであるためとの回答がほとんどであった。

#### ○その他

英語による授業は、すべてが英語で展開するわけではなく、指示語や授業内容に関係する単語が主だった。場面により、子どもたちが授業内容を理解できることが優先されているため無理なく英語による教育を実施されている印象を持つ。

高校での授業は、文法や会話など、授業によって扱う内容は異なっているとのことである。東京学芸大学の齋藤ひろみ先生の講義においても、サバイバル日本語、日本語基礎、技能別日本語など、分けて指導されることが説明されていたことと同様であった。

学校種間の違いについては、日本の学校と類似した印象を持つ。

### ○教員の語学習得状況

バイリンガル教育の実践をされている先生方は、英語も日本語も、習得技能はある程度のレベルにあり、とても向学心があり意欲の高い先生方だと感じた。子どもたちにとって、ご担当教科の本質を貫きながら、英語についての学びを合わせて深めていくことをとてもよく考えて日々の授業を実践されている。

どの教科の指導者も、英語・日本語それぞれ語学に優れた人が授業を行っていたことがうかがえた。

高校と大学の教員の語学（日本語、英語）レベルが相当高く、ネイティブ同様と感じた。

中学校では教員の英語力向上のための研修については、日本のような自治体ごとの行政研修はないようであり、代わりに各学校が助成金へアプライして、学校裁量で外部から講師を招聘したり（※この中学校の場合、英語の専門家を学期に2回の頻度で招く）、教員に検定を受けさせたりして、力量向上に努めているとのことである。

### ○バイリンガル教育の実施状況

バイリンガル教育のカリキュラムについては、国のスタンダードが半分、残り半分は独自教育で各学校の特色を打ち出すことが出来るものであった。

### ○小学校の授業者

文湖小学校では、音楽と体育で英語が取り入れられているとのことである。

女性の教員で、音楽と英語の2つの免許を有しているとのことである（2つの専攻 [例えば学士号や修士号] を修了しているとのことではない）。

### ○中学校の家庭科の授業者

中学校では、全教科に英語を取り入れているわけではなく、進学に関わる科目（日本でいう5教科）では取り入れておらず、体育や家庭科のようないわゆる副教科で取り入れているとのこと。ただ、地理の担当教員等は、独自で英語を授業に取り入れているとのことである。当該校は英語推進の拠点校として2年目であるとのことであった。

英語が専門というわけではなく、ここ数年間で勉強をして自身の英語力を上げてこれ、国のプロジェクトでヨーロッパ研修にも行ったとのことである。言葉・言語の授業としてではなく、自分自身が身振り手振りで英語を覚えた経験を活かした授業を行っている。家庭科は1人しかいないため、家庭科の担当教員が主に一人で授業開発・教材開発に取り組んでいるとのことである（時折、英語の教員に相談はするとのことである）。授業の中身は家庭科であるが、その中で英語をどの程度扱うかについては、主に自身（家庭科教員）で考えているとのことである。勿論うまくいかないこともあるが、やってみて改善しながら授業をしているとのことである。3年くらいで今の形になったとのことである。

## 文化面について

- 日本企業や飲食店なども多数あり、様々な場所に日本語が見受けられた。日本に似ている点も多々あるが、台湾独自の文化もあるため、その点については、外国につながる児童生徒を受け入れる際に、本人、保護者に事前にヒアリングをしたり、日本の学校の現状を伝えたりと、情報を共有する必要性を感じた。
- 対人関係上のルールなどは大らかであるように感じる。年上の人や先生との関係、学校の先輩後輩の関係など、戸惑うことがないか知りたい。
- 労働時間も含め、時間に対しておおらかな側面がみられ、その点で文化的衝突は考えられ、ゆえに、外国籍児童は日本の教育課程に負担を感じる可能性がある。また、いわゆる頭髪等の身だしなみに関する指導は台湾では消極的な指導がなされていることがうかがえた。そのため、染髪やピアス、アクセサリー、タトゥーといったことを施してくる児童生徒がいそうで、「郷に入っては…」のような一律指導は難しくなるかもしれないと感じた。
- その国の文化を受け入れ、話を聞くことが必要であると感じた。一方的に日本だから日本の文化を押し付けるのではなく、外国の人たちの考えを受け入れながら柔軟に対応していく必要があると思う。



台湾視察の様子

# 5. クラウドファンディングの取り組みについて

## クラウドファンディング実施まで

次年度以降は学校教員および教員免許保有者向けに常時開設することや、このプログラムを教職大学院の正規カリキュラムに組み込み、専門職学位プログラムとすることなどを目指している。その一方で、文部科学省の事業指定が本年度1年限りで終了するため、次年度以降のプログラム実施に必要な予算の確保が課題となっていた。

本学教職大学院では、次年度以降も可能な限り本プログラムの受講料の負担を軽減し、できるだけ多くの方に研修にご参加いただくことにより、今、熊本で急務となっている「外国につながる児童生徒の教育の充実」に貢献していきたいと考え、クラウドファンディングによりその費用を募ることにした。

## クラウドファンディングの概要

募集期間：令和5年12月4日～令和6年1月28日

目標金額：3,000,000円

寄付総額：3,095,000円

熊本大学  
Kyushu University

言語や文化の障壁をなくし、  
誰もが安心して教育を受けられる熊本へ！

目標金額 300万円 2023年12月4日(月)～2024年1月28日(日)まで

熊本大学大学院教職学研究科がクラウドファンディング実施中

いまこそ熊本で、外国につながる児童生徒の教育を充実させたい

【10,000円コース】 ●教員向け優待

【50,000円コース】 ●教員向け優待 (50%)

【100,000円コース】 ●教員向け優待 (30%)

インターネット上での申込みが難しい場合は、熊本大学大学院教職学研究科までご連絡ください。  
EMAIL: [ken@edu.kumamoto-u.ac.jp](mailto:ken@edu.kumamoto-u.ac.jp) TEL: 096-342-2312

READYFOR 外国につながる児童生徒 熊本大学 レディーフォー

熊本大学  
Kyushu University

We are aiming to build a place in Kumamoto which eliminates linguistic and cultural barriers so everyone can receive an education without worry.

*New is the time for Kumamoto to enhance education for children with foreign connections.*

The Professional Graduate School of Education at Kumamoto University is launching a crowdfunding campaign.

Target: 3,000,000 yen from Monday, December 4, 2023 to Sunday, January 28, 2024

Gift Examples

10,000 yen support  
●100% discount on tuition (100% back you a year)

50,000 yen support  
●50% discount on tuition (50% back you a year)

100,000 yen support  
●30% discount on tuition (30% back you a year)

Please access <https://readyfor.jp/projects/teunaganu2023>

READYFOR READYFOR teunaganu2023



熊本県で、外国につながる児童生徒の教育を充実させたい！

熊本大学

熊本大学教員大学院 海外研修プログラム

熊本では  
世界的な多文化共生の  
風潮を前に  
外国につながる児童生徒  
の教育の充実が 急務

▽▲  
児童生徒の学習支援・  
生活支援につなぐ  
外国で研修をする人材  
が不足

外国人材の  
受入れ・共生を支える  
教員育成・研修プログラム

令和5年9月よりパイロット実施中

No.	研修科目	研修内容	研修期間
1	外国につながる児童生徒の概況	子どもの実態の把握、社会的背景の理解	令和5年10月～11月
2	外国につながる児童生徒の指導	日本語・教科力の育成、異文化理解力の涵養	令和5年12月～令和6年1月
3	外国につながる児童生徒の指導実践	実習・実践、実践振り返り	令和5年12月～令和6年1月
4	外国につながる児童生徒の指導実践	多文化共生の実践、教師としての成長	令和5年12月～令和6年1月
5	教員実践研究	日本語教育実践等における異文化理解実践	12月～令和6年1月

外国につながる児童生徒の教育を深く理解する人材

外国につながる児童生徒の教育に専門的な知識とスキルを有する人材

多文化共生の視点を有し、学校・地域に貢献できる人材

学生を大きく迎える53名が受講中！

来年度以降のプログラム継続のため、皆様のご支援が必要です。

このたびは、READY FOR 株式会社を通じて、クラウドファンディングによる募金活動にご協力くださいました。同様に運営にご賛助いただいた皆様には、来年度以降も可能な限り継続的にお礼申し上げます。ご賛助の学校・教員などへお礼のメッセージや、外国につながる児童生徒の教育の発展に寄与して頂きます。

募集期間：令和5年12月4日～令和6年1月28日

目標金額：300万円

募集概要 Web サイト: <https://readyfor.jp/projects/tairegen2023>

詳細については募集ページ上記 Web サイト（募集期間中はクラウドファンディング）で表示されます。ご質問は、Web サイトまたは QR コードからお問い合わせください。

READY FOR



## 応援メッセージの例

- 私の近所にも外国籍の子どもたちがたくさんいます。親戚の子たちが成人しお年玉代が浮いた分を寄付させていただきます。
- 全ての子どもが安心して学校生活を送れるよう願っています。外国ルーツの子ども達を支援している者として、母校の取り組みを応援しています。
- このプロジェクトで学んだ先生方が、各校の実情に応じた環境づくりを進めていただくことで、外国とつながる子どもたちが、より安心して学校生活を送ることができるようになると思います。素晴らしいプロジェクトですから、できる限り応援していきたいと思います。
- 現在、本講義を受講中ですが、講師の先生方がきめ細かくフォローアップして下さり、心温まる気持ちで、新しい領域を学ばせて頂いております。すべての子どもたちが未来に夢や希望を抱けるような教育の機会の充実に微力ですが寄与したく存じます。
- 素晴らしい企画です。今後間違いなく増える外国国籍の子どもたちが、豊かに日本で生活できるためにも、

- 教師の支援は必要不可欠です。子どものためにも教師のためにもなるこの取組を応援します。頑張ってください！
- このカリキュラムを学んだ先生方が、子どもが通う学校にいてくださったらと考えると、学校全体の雰囲気もグローバル化しそうで、日本人の子どもたちのためにもなると思います。微力ですが、プロジェクトの成功をお祈りいたします。
- 菊池市の図書館主催で「にほんご教室」やっています。国籍に関係なく言語、コミュニケーションの保障の必要性を感じています。全面的に応援します。いつか受講したいです！
- これから先も長続きますようにささやかなところから応援させていただきます。20数年前のこと、夢を抱いて来日しながらこういう支援がなかったために泣く泣くブラジルに帰ってしまった母の従弟のことが切なく思い出されます。

# 6. おわりに

熊本大学教職大学院 専攻長 藤中隆久

この度、熊本大学教職大学院主催でリカレント教育事業「外国人材の受け入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム」を実施した。

今までも、熊本県内の学校現場に外国の子どもが在籍することはよくあることではあった。この問題に対して、それぞれの現場の先生方の並々ならぬ努力で何とか対応してきたという現実がある。もちろん現場のそのような努力は貴いものではあるのだが、熊本県内のどこの学校にも当たり前外国につながる子どもが在籍する時代がすぐそこにまで来ている現状において、現場の並々ならぬ努力だけに任せては限界があるということも明らかであろう。そこで、熊本大学教職大学院が主催して、外国につながる子どもが在籍するどの学校においても、何とか対応できる知識とスキルを備えた教師を養成するための研修を開催する運びとなったのである。

自校に外国につながる子どもが在籍するとなったときに、その子どもに日本語を教えて授業が理解できる能力を高めればそれでよいというわけではない。日本語教育はもちろん大事ではあるが、管理職の立場ならばそのような子どもが在籍する学校をどう経営してゆくかという視点が必要だし、学級担任であればそのような子どもが学級にいる時に、学級をどのように経営してゆくかという視点が必要であろう。また、学級経営は授業の質とも密接に関連するので、外国につながる子どもがいる学級での日々の授業をどのようなものにしてゆかも教師は当然考えなければならない。外国につながる子どもも含めて学級・学校にいるすべての子どもが楽しく過ごせるような授業、学級、学校を作ってゆく必要があるわけなのである。また、異文化理解や日本の学校と外国の学校を比べたときの比較教育学などの知識もあった方がよいと思われる。このような幅広い教育実践に関する知識とスキルを身に着けるための研修会は、教職大学院でこそ開催するべきであろう。そのように考えて、今年度から熊本大学教職大学院が文部科学省のリカレント教育推進事業として始めた次第である。今年度の途中から研修会を開始したにもかかわらず、熊本県内の様々な地域から53名もの受講生が集まってくれた。この事実には、現場の先生たちのこの問題に対する関心の高さや切実感が現れていると思われる。

事業の実際について、この報告書にまとめられている。プログラムのコンセプト（「2 本プログラムについて」）、プログラムの実際（「3 研修プログラムの開発・実践について」）、先進事例の視察（「4 先進事例・海外調査の取り組みについて」）などは、読んでいただければわかるが、充実したものになったと自負している。講師を引き受けてくださった先生方や実習生を受け入れてくださった学校現場には深く感謝する次第である。

また、今年度は文部科学省のリカレント教育推進事業として予算がつき、受講料は無料であった。しかし、今年度限りの予算であり、来年度からは研修会を開催するならば自走する必要がある、そのためには今年度中に予算を確保する必要がある、それをクラウドファンディングという手法で確保することも試みた。幸いにも目標額を確保することはできたが、その期間中は、クラウドファンディング部門の関係者一同は、集まった金額を一日に何度も確認する日々が続き、精神的に苦しい思いも経験した。その顛末は「5 クラウドファンディングの取り組みについて」として記されている。

このような苦労を重ねながら、今年度のプログラムは終了できたし、来年度の開催もできる状況ではある。しかし、これで安心していいわけではない。我々は、熊本県内のすべての学校にこの研修を受講した人が存在している状態を作るという目標を立てている。そのためには、この研修会が今後もずっと実施できるようにしなければならない。前途は多難であるが、今後も研修会を続けてゆく決意をここに記して、巻末の言葉とする。



〈資料〉

外国につながる児童生徒の教育検討委員会名簿

	委員氏名	所属等	役割等
委員長	山城千秋	大学院教育学研究科・教授/ 教育実践総合センター・センター長/ 学校のグローバル化推進検討WG委員	本プロジェクト・リーダー（PL） リカレントの教育プログラム実施検討
研究科長	藤田豊	大学院教育学研究科長/教育学部長	本事業実施責任者
副学部長	高武彦	人文社会科学研究部・教授/副学部長	多文化共生に関する助言（中国の文化に関する専門的知見の提供）
副研究科長	田口浩敏	大学院教育学研究科・教授/副研究科長・副学部長	熊本県教育委員会等との連携
附属学校 統括長	井福祐俊	大学院教育学研究科・教授/附属学校統括長	附属学校園との連携
専攻長	藤中隆久	大学院教育学研究科・教授/教職実践開発専攻長	教職大学院・学位プログラム実施責任者 事業推進・学位プログラム部会長
副専攻長	八幡彩子	大学院教育学研究科・教授/副専攻長/ 学校のグローバル化推進検討WG委員	本事業提案者/外部機関との連携 研修プログラム部会長
学内委員	鹿嶋恵	大学院教育学研究科・特任教授/ 学校のグローバル化推進検討WG委員	日本語教育プログラムに対する専門的助言 研修プログラム開発・実施WG座長
学内委員	藤本典子	教育実践総合センター・客員教授	教育プログラムに対する専門的助言 研修プログラム開発・実施WG プログラム実施検討（特別支援教育）
学内委員	本吉大介	大学院教育学研究科・准教授/ 学校のグローバル化推進検討WG委員	研修プログラム開発・実施WG
学内委員	北川雅浩	大学院教育学研究科・准教授/ 学校のグローバル化推進検討WG委員	プログラム実施検討（言語系教育） 研修プログラム開発・実施WG
学内委員	岡崎伸一	大学院教育学研究科・准教授/ 学校のグローバル化推進検討WG委員	教育プログラムに対する専門的助言（言語系教育） 研修プログラム開発・実施WG
学内委員	松瀬憲司	人文社会科学研究部・教授/多言語文化総合 教育センター・副センター長	多文化共生に関する助言（英語文化圏に関する専門的知見の提供）
学内委員	松永拓己	大学院教育学研究科・教授	多文化共生に関する助言（台湾との交流） 先進事例・海外調査WG座長
学内委員	古田弘子	大学院教育学研究科・教授	多文化共生に関する助言（特別支援や南アジアの文化に関する専門的知見の提供） 先進事例・海外調査
学内委員	橋本洋	大学院教育学研究科・教授	多文化共生に関する助言（中国との交流） 先進事例・海外調査WG
学内委員	引地力男	大学院教育学研究科・准教授	多文化共生に関する助言（東南アジアとの交流） 先進事例・海外調査WG
学内委員	八幡英幸	大学院教育学研究科・教授	ニーズ調査・クラウドファンディングWG座長
学内委員	塚本光夫	大学院教育学研究科・シニア教授	ICT・技術支援WG座長
学外委員	松永尚子	熊本県教育庁市町村教育局義務教育課・ 審議員兼英語・日本語教育推進室長	熊本県教育委員会との連携
学外委員	福田衣都子	熊本県教育委員会事務総局学校教育推進課・ 課長	熊本県教育委員会との連携
学外委員	寺前研太郎	黒髪小学校・校長	熊本県日本語教育拠点校との連携
学外委員	田口恵子	桜山中学校・校長	（元）熊本県日本語教育センター校との連携
学外委員	竹村朋子	NPO法人外国から来た子ども支援ネット くまもと・代表	関連するNPO活動からの知見提供
学外委員	秋葉多佳子	熊本県立大学・准教授	日本語教育教員養成に関する専門的知見の提供
技術専門職員	清水康幸	熊本大学技術部専門職員	専門的技術の提供/ハイフレックス・オンデマンド 授業支援/視察記録
技術専門職員	西本彰文	熊本大学技術部専門職員	専門的技術の提供/ハイフレックス・オンデマンド 授業支援/視察記録
技術専門職員	山下悠太	熊本大学技術部専門職員	専門的技術の提供/ハイフレックス・オンデマンド 授業支援/視察記録
事務職員	緒方理乃	人社・教育系事務課教育学事務チーム教務担当	事務支援
事務職員	藤山美月	人社・教育系事務課教育学事務チーム教務担当	事務支援
事務補佐員	安東千恵	人社・教育系事務課教育学事務チーム教務担当	事務支援

「短期履修証明プログラム」受講者アンケート結果（回答者：46名）

1) 受講者年齢層

回答項目	20代	30代	40代	50代	60代	
人数	1	9	12	16	8	(人)

2) 本プログラムに対して受講前に期待していたこと（3つまで選択可）

回答項目	人数
専門的・先端的・高度な知識・スキルを得ること	37
幅広い知見・視野を得ること	35
独創的な発想による課題発見・解決力を向上させること	6
知識に基づいた深い洞察力を涵養すること	12
当該分野で有名な教員から学ぶこと	10
同じ目的意識をもった受講生と一緒に学ぶこと	8
履修修了証（履修証明証）を得ること	10
資格を取得すること	4
社外（学校外）の人的ネットワークを得ること	7
その他 個に応じた支援の仕方、外部とのつなぎ方を知るため	1

3) 前の問に対する満足度

回答項目	とても達成できた	やや達成できた	あまり達成できなかった	
人数	25	19	2	(人)

4) 本プログラムを選ぶ際に、カリキュラム内容以外で重視したこと（複数回答可）

回答項目	人数
受講期間や時間がフレキシブルに選べること	20
短期間で修了できること	20
通学しやすい場所に学校・教室が整備されていること	8
オンライン等を活用した遠隔授業が受けられること	36
夜間、土日、休日等の社会人に配慮した時間帯で授業が受けられること	24
授業料等が無料であること	29
授業料等が安く設定されていること	3
その他 行政の現状を聞くことができること	1

5) 本プログラムが有料となった場合、適切だと思う受講料

回答項目	1万円未満	1万円以上5万円未満	5万円以上10万円未満	無料でないと受講しない	
人数	17	21	4	3	(人)

6) 今年度の残り1科目「外国につながる児童生徒の教育Ⅳ」の開講時期の希望（複数回答可）

回答項目	5月	6月	7月上旬～中旬 (夏休み前)	7月下旬	8月上旬～中旬	その他
人数	9	7	5	24	21	2

7) 今年度「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ～Ⅲ」は、各科目土日集中講義として実施したが、来年度以降これらの科目を開講するにあたり、どのような実施形態が受講しやすいと思うか

回答項目	人数
今年度と同じ土日2日間の集中講義（月1回程度の開催）	21
毎週土曜日または日曜日のいずれか1日（午前・午後2コマ）の隔週での開催	9

毎週土曜日午前または午後いずれかに2コマ×4週（1か月間連続）の開催	3
夏休みや冬休み等長期休業期間中（平日）に各科目2日連続での集中講義	12
その他 週末半分を分散開催	1

(人)

8) 本プログラムで学んだことをこれからどのような立場で活かしていこうと思うか（複数回答可）

回答項目	人数
学級担任として	17
教科指導の担当者として	18
特別支援教育の担当者として	13
幼児等の教育・養育の担当者として	2
日本語指導の担当者として	14
外国につながる児童生徒の学習指導・生活指導に関する支援員として	13
学校や幼稚園等の管理職として	6
学校経営やカリキュラム・マネジメントの作成に関わる教員等として	9
社会教育の担当者として	4
地域作りの担い手として	6
教育行政の担当者として	1

(人)

9) 本プログラムでよかったこと（複数回答可）

回答項目	人数
プログラム（授業）の内容	37
授業の担当者・講師陣	30
教育実践研究（観察実習）	35
Web ページ等による情報提供	8
e-learning システム Moodle によるオンデマンド授業	29
Zoom によるハイフレックス授業	20
授業実施形態（土日集中での授業実施）	19
その他 無料で受講できたこと	1
その他 研修を受講している先生方とネットワークができたこと	1

(人)

10) 今年度の本プログラムで改善してほしいこと（複数回答可）

回答項目	人数
プログラム（授業）の内容	7
授業の担当者・講師陣	1
教育実践研究（観察実習）	9
Web ページ等による情報提供	7
e-learning システム Moodle によるオンデマンド授業	2
授業実施形態（土日集中での授業実施）	11
特になし	8
その他※	8

(人)

※その他詳細

- ・駐車場の確保と出来れば無料化を希望。現地学習で校内に無料で駐車できることを希望 (3)
- ・資料の提供の仕方（日ごと一括ダウンロードできると助かる）(1)
- ・終了時間が30分でも早くなれば仕事や家庭との両立がさらにしやすくなる (1)
- ・特別支援学校勤務だが、研修の案内をいただけると出張として参加しやすいと思う。(1)
- ・グループ内で意見交換する時間を必ず設けてほしい (1)
- ・観察実習が午前中開始で朝の渋滞に巻き込まれ大変だった。午後からの開催にさせていただけるとありがたい。(1)

\* 本事業は、文部科学省 令和4年度「成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業（メニューD）リカレント教育モデルの構築による大学院教育改革支援」の採択を受けて実施したものである。

プログラム名称 シリコンアイランド九州の中心で外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム@教職大学院  
事業責任大学名 国立大学法人 熊本大学  
プログラム責任者 熊本大学大学院教育学研究科長 藤田 豊  
事業実施期間 令和5（2023）年6月19日～令和6（2024）年3月29日

文部科学省 令和4年度  
成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業 採択事業

## シリコンアイランド九州の中心で外国人材の受入れ・共生を支える 教員等養成・研修プログラム@教職大学院 実施報告書

発行日 令和6（2024）年3月19日  
発行者 国立大学法人 熊本大学大学院教育学研究科（教職大学院）  
〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-40-1  
TEL 096-344-2111(代表) URL <https://www.kumamoto-u.ac.jp/>  
印刷 ホープ印刷株式会社





